

昭和廿三年七月一日第三版
 昭和廿六年八月一日發行第六期第八號
 每月一回發行
 大正十三年
 卷二百九十一號

Pensej flugas trans la land - limon
 The Senryu Zasshi
 No. 291

麻生路郎☆主筆



八月号

川柳の雑証

老人の日

九月十五日に「老人の日」と云うのが出来る。その日が、この日だけ電車や汽車で席を譲ってもらつても、翌日から又立たされるのでは、あまりありがたいとは云えないだろう。それよりも「二号の日」と云うのをこさえて、せめて一日でも奥さんになりたいと云う願望をかなえてやつた方が、よっぽど功德になりそうだ。

中産階級の没落

戦前の日本では國內に中産階級が根を張つていて、國力の強靱さを誇つていたものだが、敗戦後の日本を見渡すと、何ての中産階級が殆んど下層階級に落ちて、いるような気がする。

としたら、日本も落ちぶれたものである。しかし、それも無理はない。雲の上の人が、雲から降りて来られ人間並みに課税され、竹の園生の人達が、古着を賣つたり喫茶店をはじめたり、銀を手に入るような世の中になつたのだ。同時に従来の上層階級は殆んど

く人達も相当にいるだろうと思われるのが今の日本の現状である。一方でヤミであぶく銭を儲けた人たちが、ヤレ温泉、ヤレ、キヤパレーだと敗戦を知らぬ顔でのごさつてゐる。こんな人達が日本の中産階級であつたり、上層階級であつてはたまらない。



窓口談義

麻生路郎

漏りのする家に住み、ブライドだけ中産階級の居残り組が多いように思う。ローアクラスよりもましなものを買つていて、下着類すら満足に買えない中産階級なんて凡そあり得ないだろう。

雪散霧消した。そして、今までの中産階級だったものが立派に下層階級に落ちていながら、アツパークラスやミツドルクラスの面子を増やして、流れては悲しい滑稽である。

追放解除の大物に
最近、大量に追放解除があつた。その中には所謂各界での大物と云われる人たちがいるが、解除されたら、もう罪は消えたのだと思

つたら大きな間違いだ。当分は矢張り謹慎してもらいたい。大物が解除されて喜んでゐるのは、その取り巻位なものである。子を失つた親、夫を亡くした妻は今日でもなほ苦しんでゐるのである。みんな右え寄れと云われながら、右え寄つたら船は引っくりかえつたのである。それで多くの人が溺れ死んだのである。今度又出しやばつて左え寄れと云うて再び船を引っくりかえさないものでもない。私たちはもうそんな指導者を必要としない。大して前進しないまでも、もつと安全な船長をのぞんでゐるのである。解除された所謂大物に最えて苦言を早する所である。それは杖を食つた人達には今後、附和音同や便乗主義がどんな結果を招来するものであるかを云えば充分である。白重々々。

大物え微遠と云う手で向い
不朽洞会から編輯室にて

八月号目次

題字 麻生路郎
表紙(照猫) 山比種三郎

續川柳講座 麻生路郎(六)

河童の灸 前田 伍健(二)

飯き炊く名士 諸 家(八)

二階 吉田 水車(四)

川柳吟行 馬唯 飛ぶ ウキロー吟社(二)

次男誕生 弘津 柳慶(六)

武蔵坊弁慶(上) 富士野鞍馬(八)

窓口談義 麻生路郎(三)

川柳漫釈 小畑自由助(二)

不朽洞喫煙室 豆秋・鮎美(七)

詠史川柳(につぼん) 戸田 吉方(三)

★ BK放送川柳(入賞者)中島生々庵選(七)

不朽洞句帖 麻生路郎(七)

近作柳樹 麻生路郎選(三)

川柳塔 麻生路郎選(三)

同舟近詠 諸 家(三)

一路集「煙突」 高川抱邊選(三)

各地柳壇 武部有林選(三)

動 靜 (四)

不朽洞会から (七)

編輯室にて (三)

(六)



大阪市 武部 香林

金は無くとも新緑だ新緑だ
一夫一婦蛙は泥にまみれても

横濱市 福田 山雨楼

近所では娘と同年が嫁く
豊彦の傳記を読めば妾の子

皇太后陛下を悼み奉る

下々も駈けつけ申すのに、まして

芦屋市 寺井 鋭々

何が淋しいのか灯を見れば飲み

小切手など女給に見せて飲んでいる

洋館の方だけ賣つて斜陽族

女社長インタービューへ氣が強し

春愁にあらず明日焚く米がなし

池田市 戸田 古方

司会してはつた汗かいてはつたとみつけられ

暑いのにあどちヨツキを着るくらし

飲むくせがまたつきそうアルバイト

ホノル、内藤 草一郎

貞操で亭主の醜をつなぎ止め

親善だ相なペコ／＼して笑ひ

若い氣で居ても求人欄のそと

尼ヶ崎 水谷 鮎美

大阪歌舞伎座にて
太功記

取囲まれた光秀の惡に生き

心中天網島

内まきは知らず丁稚は灯をともし

東京都 宮田 不二

僕一人生きるスペース見当らず

ステッキがいつそさびしい斜陽族

嬉しさを問えばキヤラコが安くなり

楽しみはヤールへ挑む勤めの娘

岡山縣 浜田 久米雄

六十を越した頑固を放つておき

アロハシャツ笑顔を忘れきつた顔

禁煙の男の顔が見直され

大牟田市 高田 抱逸

永勤表彰みんなの笑ひ寂しそう

濡れ衣が晴れて警察派手に出る

裏街に新聞記者は趣味をもち

空席を大阪までもつけぬらい

ハワイ市 岡 曉舟

甘庶見るたんびに初代眼に浮かび

慰問品なんだかんだで儲けて居

佐賀縣 松野 えいを

貯めるだけ貯めて中風で寝てしまひ

追放の解除へ靴も手入れして

大阪市 市場 浚食子

子に新語聞けば字引にない云ふ

英会話夕餉の跡の親と子と

名古屋 吉田 水車

信心をするにもひまど金が必要

ヒキ蛙防空壕をわが家にし

大阪市 須崎 豆秋

牛までがサンマタイムで起こされて

ポケットのマツチ江戸前にぎりすし

鴨川 踊

常盤津の湧えて十二の撥白ろく

選 挙

筆執つてから候補者の名を忘れ

大阪市 竹内 潮花

金の世と悟り娘も家出する

宿の灯の遊びも知つて女事務

嫁の荷にする氣かミシン買ただけ

御ひいきへ舞台化粧の儘で逢ひ

奈良縣 尾崎 方正

藤棚の奥に駅前駐在所

座を占めて乗り間違つたのに氣付き

田舎道牛が一疋通さんば

岡山縣 逸見 灯竿

夏の訪問玄關で長う待ち

親のするとはりをしても叱られる

かゝる恋かくなり果つるおきてなり

大阪市 木下 幽王

アコーデオンわたしや白衣に賣られゆく

クラリネット顔は見ないで頂だいね

病人が時々調べる貯金帖

税務署が来たら病氣や云うといて

大阪市 福田 安夢

盗まれるしあわせ盗むふしあわせ

今死ねば二三人がど泣くららん

日雇ひの汗よ燥として陽にかゝやけ

出雲市 尼 緑之助

誘蛾燈青く並んだ風物詩

誘蛾燈蛙ガア／＼よもすがら

轉 勤

辞令一枚波濤のかげにもまれるし



引き揚げてからの片意地とはさみし

大阪市 水谷 竹莊

金無いと見れば女のおそくし
さきで添うつもり二号で待つてゐる

南北氏に

亡き妻を偲ぶ翁はほめちぎり

下関市 弘津 柳慶

ワンマンわこにもあつただんな様
父の炊事は煮物屋で間に合せ

大阪市 土井 文蝶

大望はあれどその日の糧が先

税務署が何んでそないに恐いのや
逆らうて見る氣もおこる儲け様

榮轉も昇給もなき職に生き

高岡市 山根 白星

金持ちになれどは母ののたまわす

胎動に夜目にも白き花と居し
渡米熱僕には明日の錢がない

眼と眼と眼いま眞二つになる西瓜

大阪市 富岡 淡舟

百円の借り貸をする裏長屋
天にまします神に祈れど死んぢやつた

大阪はよいとこ無職で暮して居

お隣と比較対照してすねる
ストリップ見ていやらしい人にされ

寝化粧をして未亡人切なかり

奈良縣 飯降 白香

愛情の危機に長男生れたり

奈良縣 西辻 竹青

家賃五円新婚の頃なつかしく

山口縣 長野 井蛙

舞台裏までも課長に打ち明し
税務署の臆面もなく床柱

同権もまだ容れられぬ風呂の順

吳市 林 野麴

あつさりと言へば薄情者にされ
言訳になつて男のまづい朝

薬瓶置いた手もとの蠅を打ち

大阪市 竹田 蘆穂

乳呑子が子守をなめたやうに泣き
良い智慧が出ず算盤を零にする

簡単な式で三女をかたづけける

大阪府 友淵 貴山

情熱に背廣の型は崩れかけ
時の人撮れず漫画にしてしまひ

スナツプの裾ははつきり春の風

布施市 森下 愛論

自惚れでした女は他家へ嫁き

大阪市 松江 梅里

謎かけて解けて嬉しい博多帯
一流の妓になつて振りむかず

岡山縣 丸山 弓削平

孤独ですだからガラスを拭くのです
貞操を奪われそうなる雨になり

留守番をする子は風の音を聴き

未亡人また誘惑へ乗り遅れ
小鳩また小鳩の智恵で逃げ終せ

女から山の繁みへ誘はれる

無理言うて呉れて嬉しい二号邸
打ち明ける積りの酒と女知り

宇部市 上林 粗影

日給のみちめきスト権有りはあり
この話題夢声にさらわれた銀座の灯

二度目の父とは云わぬ入試室
無断外出衣裾に長き妻の帯

独樂の子だけ夕焼の街に残された

鳥取市 河村 日満子

まばゆきは陽の光今日から白線浪人
医療辞典医者にかゝれと書いてあり

メーデー

政党的祝辞拒否してデモに入り
出世しすぎて親戚寄りつかず

妻子ある身を隠して悲劇なる

兵庫縣 家沢 薺花

嫁入りもさせた昔の五百円
入学日この子を産んだ日を回顧

弟の出しやばり兄の分も言ひ

デパートの地階の好きな妻と来る
ランデブー机並べて居りながら

あの熱と力当選後に欲しく

滋賀縣 黄瀬 美秋

山奥の校長さまに榮轉し
まだ乳の呑みたい顔で舞扇

母屋から珠数借つて行く新世帯
日曜出勤と言ふ事にして逢ふ二人

岡山市 藤本 満年

尊敬はせぬが氣樂な友であり
体温計睡眠不足は測られず

茶柱が立つたぐらいで嬉しが

熊本縣 西口 如川

妹の方は螢に氣を取られ
口紅の濃ゆき行儀の作法さ

表彰をされても寡婦の味氣なく

岡山縣 福島 鉄兒

焼香のあれが二号と囁やかれ
女房は金の亡者になつてゐた

たつた十円かと子のうそぶける
京都市 谷内 一草



酒のめどいさめてくれる妻は亡し

タン〜鉄骨は伸びて行く

自分だけ笑つただけのユーモア

くれ〜も油断するなど汽車の窓

兵庫縣 榎南夏六

頼堀へ来てみてホタルは驚いた

善は急げと思えども金無かりけり

何の夢砂サラ〜と掌より落つ

バ、マ、と呼ばしてみたい金が出来

大阪市 西 いわを

お忘れになつてと女瞳をつかい

病床を訪へばビールを飲みたがり

岡山縣 高山朗笑

午後の朝顔失恋の形なり

櫻櫻奢れ短い生命なら

野兎よオリンピックに出る氣かい

叱る氣の母口つむぎ石の如く

岡山縣 服部十九平

生き伸びた命へ追放解除沙汰

螢狩り大阪弁の子も難り

戸を閉める音に余憤を捨てゝ出る

岡山縣 大森娛句樂

酔うて戻り句碑の前ちと恥かしい

旅疲れ妻の言葉の有難し

西宮市 田辺由布

ヌードよしストリップよし暑い夜

スラム街ソ連歸りの顔が利き

裏長屋ダモイ取巻く夕涼み

大分縣 桑原表情

性病の講議に夜学襟正し

藤本縣 成瀬月仙

故郷の母信玄袋と旅行する

闇をした頃がよかつた米袋

サンマタイム前の何時とつけ加へ

岡山縣 若林草右

紙芝居一番前で犬がきゝ

子を背負ふた母親強し満員車

大阪府 足立春雄

月遅れに雑誌読んでる主婦であり

夏時間何時もの通り雀くる

大牟田市 中村五醉

麗人の眼鏡近づき難くする

サツソーとは男を馬鹿にした歩調

おだてるなどと嬉しい顔が言ふ

國破れて山河あり家はなし

依給へおいらの價値はこればかり

月賦だと子等も知つてる服を着る

熊本縣 有働芳仙

初心な娘の芯の固さへ突き当り

スカートを脱いで人生急カーブ

ひがみもあるう後家の大胆さ

香川縣 大西迷窓

婦人科医馴れた手付がふと淋し

指導者が純情すぎてまどまらず

絶壁を氣にせずバスは通り抜け

岡山市 延永忠美

まだ着れる三十円で買った服

助かつていつそ着物もおしくなり

大阪府 浜畑胡蝶

恋もない過去で妻にも見くびられ

下関市 石川侃流

メガホンへ少ししつこいなと思ひ

女丈夫とかで養子も三代目

岡山縣 大森苑女

山から見れば我が家の小さく小さく

ブラットで案外冷めたいお辞儀され

肥つたを報らせる手紙くど〜と

子を抱いてふくき捌きはもう忘れ

理想一度洗い流す氣机拭く

岡山市 大倉四案

極道は田植えが済めば帰つて來

非農家の日曜白い眼で見られ

結婚を前に最後の苗を取る

廣島縣 山田季贊

觀光團紙張りの城見て歸り

バスの窓田植も済んだ水の色

飲むよりはましと恭盤へ茶を運び

臍くりの傳授に永居して歸り

受付けはかける芝生を淋しがり

大阪府 麻生霞乃



たっぷり

愛嬌たっぷり

B1たっぷり



疲労と脚氣に

強力★タボリン

錠・注・無痛注



續川柳講座 (25)

麻生路郎

上五名詞の句に就て

句の姿を検討すると、他の句との間に、いろ／＼共通点のあることを発見されることと思ひます。

例えは
梯子酒わが淋しさの果てしなし (野介)
春廣服頭の中が知れる柄 (文庫)
ノーチツ自分、屏押して出る (正則)

それ／＼違つた内容を持つてゐるこれ等の三句を形式の上から検討して見ますと、上の句が何れも五音字であること、何れも名詞であることに共通点があります。そこでこれ等の句と同じ形式で作られる句をすべて上五名詞の句と称します。上五を名詞で作句することは技法が比較的ラクでありますから、初心者にはこの手法を用いた句が多いようであります。それだけ作り

よいのかも知れません。

句を作るのに、「二日酔」

とか、「新世帯」とか云うような五音字の課題が出た場合には、まづこの五音字を据え次に中七音字、下五音字と続けて一つの句にまとめるのであります。しかし同じ課題の句を沢山作るのに、どれもこれも、同じ上五名詞では笠附の感じがして、それ等の作品が読者に與える感銘がゲンと減少することは云うまでもありません。

尤もそれ等の一句一句を切り放して読めば、いろ／＼の角度から詠まれているのには違ひないのですが、ズバリと同じ課題の上五名詞が羅列されると句が鼻について興味がそがれるものであります。雑吟を作る時でも、同じ上五名詞で幾つか作ることがありますが、この場合には大抵中で一二秀れた句だけ残して他は没にするのでそれほど目立たないのであります。

上五に課題の名詞をそのまま据える手法は一番平凡なと云つては語弊がありますが、つまり奇策のない平叙法であります。この場合上五が多く句の主体となりますので、勢い中七、下五の技巧の良否でいゝ句にもなり、悪い句にもなります。中七、下五が單に上五の内容の説明に終つた場合には説明句だとして没になります。句は描寫であつて説明ではないからであります。

しかし初心者には上五に名詞を据えることよく説明の弊に墮するものであります。又上五名詞で構成された句の多くは下五が終止言か連用言になります。上五が名詞であるのに、下五が又名詞では句がギョチなくなり易いからであります。上五が名詞であるのに、中七も下五も名詞で句を詠むこともありますが、そうした表現で句が活きることもないことはあります。名詞の羅列で佳吟となる場合は句調の良否が句の構成上に特に影響いたします。

経二分話一分盆の寺 (自由朗)

などは、このよい例であります。上、中、下が何れも名詞で、名詞と名詞をつなぐ接続詞もないし、名詞に続く助詞もないが、それでいて、盆の僧侶の忙しさが巧みに描出されてゐます。

さきに上五名詞の下五の多くは終止言か連用言であること述べましたが次にその例を挙げることいたします。

巴燒五十銭がに (うたへる)

(かほる)

この句は「る止め」の句であります。この場合の「る」は口語の終止言であります。

これは助働詞の終止言止めであります。

(文久)

これも終止言止めであります。

女風呂さつきの所 (徹底郎)

坊主持あれも範圍のうちへ入れ (一路)

右の二句は共に働詞の連用言止めであります。しかし、連用言止めは上五名詞によつて構成された句に限られた訳でなく、川柳の多くが連用言止めであつて、川柳そのものの表現形式の一つの特徴をなしているものであることも知つておく必要があります。

「なり止め」の句

なり止めは句と云うのも十七音字の末尾が「なり」で止

最短時間で結ぶ
大阪・名古屋

時間
3 特急
毎日 3 往復
近畿日本鉄道
特急料金 100
上本町發 7.40 12.40 16.40
名古屋發 8.00 13.00 17.00



まつてゐる点で句の姿が共通するところから、名づけた名詞であるが同じく「なり止め」の句と云うても二つの種類があるのであります。その一つは「成り」の意味をあらわす句であり、他の一つは「也」の意味をあらわすものであります。「なり止め」の句は「俳風柳樽」を繕いて見れば判りますように古句にはザラにある形式でありますが近ごろでは余程少なくなつたようであります。その主たる原因は、「なり止め」を用いると、つい句が説明に陥り易いので、知らず識らずに避けるようになってゐると思われまゐります。次に「成り止め」の例句を挙げて少しく解説を試みることにいたします。

我々の家にあから厩になり (点漁老)
養うてあげると云はぬ妻となり (雅園)

女房を殿ると猶も居なくなり
 (九史) 見えるかと母は子供の丈となり
 (琳郎) 氣短と云はれるほどの地位なり
 (正市) 焼香の順が次第に早くなり
 (塊人) お茶室のわきで筍竹になり
 (柳秀) 金持でば金持らしい顔になり
 (路生) 洋食と聞いて缺席多くなり
 (筑川) 看板屋儲かりそ 風になり
 (耕一路) 古典趣味だけが身につ 年となり
 (八歩) 以上の例句によつて観まして
 「成り止め」の句は穿ち味を強く出すのに適するようでありませう。

句、「洋食と聞いて」の句、「古典趣味だけが」の句は何れも穿ち味の句であります。「お茶室の」の句は穿ち味の句ではありませんが、何んぞなく飄逸な感じが出ていて、それがこの句の魅力となつています。「看板屋」の句は風が段々強くなつてゆくのを、ホクッ笑んでジツと凝視している看板屋の姿が浮き上つて来るのであります。嵐と云わずに儲りそうな風と云つたこと

女で立てる余技あり名士なり
 (言人) トラックに積むと嫁の荷じめなり
 (樂飄) 貨車の牛神戸を指して急ぐなり
 (新木) あるところあると寄附の話なり
 (東魚) 死にますともヒス第一巻の終りなり
 (生々庵) 直江津にて
 佐渡おけき風に流れて来そうなり
 (八歩) 支拂ふて幹事の財布へこむなり
 (大門)

不朽洞句帖

麻生路郎

彼の女の浴衣がのれんとなつて揺れ
 パン／＼の娘の方に養はれ
 嫁入りをして大劇と縁が切れ
 ママとなりスターのサインどこでなし
 賣る土地があつて老人折れて出す

「也止め」の句も前述の「成り止め」の句と同じように穿ち味が強く出ています。「借物でない」の句は皮肉であり、滑稽でもあります。

作中の人物が眞面目なだけに一段とおかし味が感じられるのであります。「御近所へも」の句、「女で立てる」の句「あるところにや」の句はねらいが穿ちにあると云えるでしょう。「背の低い」の句「支拂ふて」の句は同じく穿ちの句であつても軽い滑稽味を感じられます。日本大使の句を読みます、思わすふき出したくなり、幹事の財布が、会費でハチ切れそうになつて、支拂いがすむと凹んでしまふ、常に自分の金でそれほどふくれたことがないだけに、一寸淋しさも感じるが、滑稽にも感じられるのであります。「トラックに積むと」の句は穿ちの強さが、はじめを更に強めた深酷な句だと云えます。「貨車の牛」の句は深酷さが前句よりも更に強く出て居ります。「死にますとも」の句も深酷な人生の一面面を詠んだものであります、多少作つた云う感じがいたします。「佐渡おけき」

の句は作者が実感を詠つたものだけに穿ち味よりも情景の美感が迫つて来るところにこの句のよさがあると思ひます。要するに「成り止め」の句も、「也止め」の句も前述の通り穿ち味が強く出るところに特色があるが、それだけに説明句に陥り易いと云う難があります。その点ラクな手法に見えていて難しいところがあります。

BK放送川柳

「手遅れ」中島生々庵選
 入賞句

手遅れにせめて乳房をあてや
 大阪市伊藤定子
 手遅れの死貧しさへの怒り
 大阪市塩浜文雄
 氷割る錐手遅れのひとり言
 大阪市大石文久
 嫁ぐ娘へもうわが恋は明す
 和歌山縣今井久吾
 友情が手遅れすなど貸して
 大阪市水谷竹莊
 (七月十四日放送)

愉しき哉
 頭痛なき人生

頭痛新薬

ダミシ錠



徳天堂製

アメリカ・アイバース・リ社
 特許サニテープ自動包装使用

次に「也止め」の例句を挙げることにいたします。
 借物でない白足袋ばかりなり
 (路生) 御近所へも聞かし僅促帯なり
 (雅樂) 春の低い一人は日本大使なり
 (六葉)



飯を炊く名士

—女読むべからず—

功する自信があります。

大阪市立美術館長

望月 信成

私は飯をたくことは堂に入つて、女房はだしです。私の母が私を料理や飯炊などきびしく教へました。そのおかげで、女房にねこまれても不由なしに來ました。

女房の奥の手おやちよくぞ知り駄句お笑ひ下さい。

医学博士 澤田四郎作

学生時代夏休に友人三名合宿(羽衣海岸)の第一日、各自食べる予定の杯数を茶碗ですくい炊きました。米が膨れる事を知らなかつたので、噴火口の熔岩の如く流れ出てびつくりした事がありました。

夕刊新大阪主筆

井上吉次郎

戦争中田舎の疎開先で一度やつてみました。鯖の干物や南京ジャガイモ手当り次第たき込み醬油を入れた飯です。なかなか風味よく出來ました。飯というより雑炊というのがほんごでしようか。

雑炊の故にならね火傷なり

元代議士 河盛安之介

一、飯を炊いたことはあります。

一、一ツ橋在學時代の休課中は鎌倉四覺寺内の如意庵摂木庵などで修業した時に。

一、腕前は相当なものです。

作 家 野村 胡堂

五十年前友人と自炊生活をしたとき、始めて飯を炊きました。腕前は上々で、失敗したことはありません。但し火をおこすのが厄介で石油をブツかけたところ、石油カンが爆発して、少々怪我をしたことがあります。自炊の仲間には三人、三人共早世してしまひました。

作 家 草西 正夫

時にふいと炊いて見たくなります。文筆屋の悲しさに座業ばかりつゞけているので、散歩以外に一つのリクレーションのつもりでやるのです。

が、米のどぎ方には大いに自信があります。酒米のように白い汁がなくなり米がどがる程トグのですが栄養がなくなると云つてフラウに叱られます。水加減をきかないと失敗

する程度。お答まで。

洋画家 石井 柏亭

飯ばかりでなく自炊の経験と云うものを全然して居りませんが、それで今日まで一度も困つたことはありません。

医学博士 高安 六郎

確にあります。それは戦災後のわび住居で老妻が高熱でへたりこんだ時でした。配給の薪を二合腹で割るのもつらいがそれを燃やすのに一層骨が折れ大世話場でした。でも肝心の飯の出来工合は存外上の部でしたが、その後二三度同じような目に逢うた時にはもうガスが十分出たので大助かりで、始めは傍に時計を置いて麦、外米など分量次第に一々時間を測つて加減を見ておけばあとは万事OKと読書の片手間にでも出来るようになりました。

詩 人 小野十三郎

子供たちがまだ小さかつた頃、家内が病氣をした時、一回炊かされたことがありますが。但しそのときも釜を病人の枕元にまで持参して水加減を見てもらつたり、いろいろ指図を受けることにした。ど

(編輯局)

文学博士 中村 直勝

私のやうな不器用ものに飯を炊いた事があるかといふ御尋ねは麻生先生にも似合はぬ的外れです。川柳の一失でも申しますか。しかし実は度々炊かれますから腕前は確

飯の種類と云う言葉がある。飯の食いはぐれと云う言葉もある。他人の飯を食わねば人間になれぬと云う言葉もある。日本人にとつてはそれほど重大な問題を含む飯ではあるが、飯を炊くと云うことは何処の家庭でも主婦の担当になつていて「オイ飯や飯や」と主人公は台所へ入り込みさえすれば喰べられることになつてゐる。その「飯を炊いたことがあるか。炊いたとすればどんな場合か。腕前はどうか」を名流の方々にお聞きして見た。敬称略・到着順。

作 家 宇井 無愁

在京五年のうち四年は自炊生活をしました。しかも悪質の配給米にトローモロコシなどの頑固なマゼモノを加えて炊かねばならなかつたので相当研究をつみました。その点女房などというものは一体に研究心も努力心も足りません。鍋や米の質やマゼモノによつて火加減水加減が異なりますから最初は失敗するかも知れませんが、二度目からは必ず成

川柳 馬哇へ飛ぶ

ホノル、ウキロー吟社

馬哇島吟行が

決るまで

魔花麗

今年正月馬哇島から稻石がひよつこり出て来たので三四人の者で歓迎宴を張つた。その席で稻石が馬哇に遊びに来ないかと誘ひかけたのが動機となつて是非ウイロ社に馬哇吟行をやらうと云ふことになった。快夢起、曉舟、魔花麗が請元になつて会員募集、宣傳に乗出した。何しろ定員二十八名の飛行機一台を借り切つて行こうと云ふのだから、相当の人数を集めなくてはならない。宣傳これ効めた結果二十四名は大丈夫だと曉舟が第一回報告を齎したのに氣をよくして、善は急げだ三月に決行しようとの大体のプランを作り馬哇の方へお伺ひを立てゝ見た。

所が三月に入つたら雨はデヤン／＼降るし風は吹くは一向に天氣が定まらない。馬哇の方からは目下山は大荒れでとても登山など出来ないからもう少し延ばせと云つて来る。その中四月も過ぎて五

月に入つた。もうちつとしては居られない、万難を排して五月二十八日に決行すると馬哇へ最後通牒をつきつけて、会員再編成ようやく二十二名を得た。

往途飛行機の中

河舟

希望のウイロー社同人馬哇吟行の日は愈々訪づれた。

飛行機は惜切り、一行家族同伴廿二名嫁々として定刻までに参集記念撮影後一同機上の人となる。今日は南風強く離陸直後の震動激し、其処彼処に婦人連の絹を裂く様な声に一寸度胆を抜かされる。機は既に金剛峯の上空にあり團長快夢起氏はと見れば愈々親念した如く両眼を閉ぢたまゝ一言も発せず、前方の魔花麗氏は元氣よく誰彼に眼下に見へるモロカイ、ラナイ諸島を頻りに説明して居るらしい。快夢起夫人も夫君を見習ふ訳でもあるまいが、お氣の毒な程静かである。曉舟氏は愛妻家の定評に春がす夫人の側で優しく勞はつて居られる。風は次第に強くコースを西に取り迂回し始める頃、快夢起氏は口元へ手をやり何か催すらしいと見た僕は、直ちに用意の器物へ「(銀)吟行の出店機内に初開き」予定より十分後れやつと馬哇飛行場着、一同ホットしてタラップを降りる。

後にして思へば、笑有氏と約束の富士正宗を機内でヒツカけるのを忘れたのが残念であつた。

ラハイナ行

沙兆

「ハロー／＼、ジョージ僕だフランクだ」
「ヤー何時馬哇に来たのかね、ピジネス？其れとも」
「いやウイロー社の人達と一緒だ」
「夫なら僕のカーを使ひ給へ」
「OK、サンクス」

ジョージは馬哇一の宝石商で二台ある中の新高級車を僕に提供した。それやこれや手間取つて浜田旅館に帰つた時は全員既にラハイナに向て出発した後だつた。

「急げば追付く」と云ふ浜田氏の言葉で、私は時速六十五哩のスピードで皆の後を追つた。

蕉畑の中を数哩も続く直線道路を過ぎ、太平洋の怒濤岩を喰む九十九折のオロワルを過ぎた頃に漸く一行に追付いた。

それから間もなく古都ラハイナに着き有名な巨大パンヤン樹を見、町を通り過ぎて果しなく続く甘蕉畑、さては見渡す限り黄金色に色づいた鳳梨畑にマウイ島産業の隆盛を語りながら、遙か紫に霞むラナイ島を眺めつゝナビリビーチに向つた。

途中、笑有と河舟阿酒仙の沈没、カナバリに於ける烟波の迷子事件等の珍談もあるが割愛する。

親善句会

曉舟

何はともあれ一同稻石主人御好意の湯槽の中で疲れた身体を休め、これで浴衣がけに團扇、螢でも追へたらなと故郷の夕涼みを思ふ。

晚餐は全く文字通りの山海の珍味に飲ける口は菊正だビールだと早くも取組んだがホノル、側の正横綱、河舟、笑有ごちらも道中のチビリ／＼が祟つて張出になつたので、魔花麗曉舟代つて堂々の陣を張れば馬哇方、潮風御大車騎駒を進めて應戦する。

腹も出来たし、此辺で句会と行かうかと快夢起の命令で盃合戦中止、席題「新」夏瘦「苦吟に移る、正面一列に宵蛙、芳雨、純香

煙波、野涉、河舟並んで何れも眞剣な面持ち、此方は銀草子、好子快夢起、魔花麗、泉水、曉舟、稻石、潮風、沙兆これ又雑音又雑音に妨げられて頭痛鉢巻とある。苦吟三十分、投句が済んで互選発表となると相当な秀句もあつて馬哇側仲々優勢、ホノル、側提供の現今賞は中村銀草子の手落ちた。

ハレアカラ登山

純香

昨夜の句会が賑つて寝るのが遅くなつたが、三時起床と云ふ約束なので二時半には目が覚める。愈々ハレアカラ登山が用意のセターを着込んで階下に降りる。

全員集合、車五台に分乗四時出発、宿を出て道幅の廣い道を右折すると甘蕉畑だ。それが盡きると草原や林が続いて、そろ／＼ハレアカラの麓に差掛つたのだろふ道が次第に登りになる。何と云ふ花か美しいのが霧の中に揺れて居る。中腹頃から道は九十九折、カフルイやワイルクスの町が右に左にまるで蜃氣楼の様で此辺から山に來たと云ふ感が深くなる。八合目あたりから雲霧が益々深く、二米先も見えない程の危険なドライアを、巧みに操縦する運転手君は流石に馴れたものだ。

足の先が冷え出したので、頂上が近いなと思ふとはや自動車の窓硝子まで霧でグツシヨリになつて居る。頂上の展望所側で車を降り

ると、身を切る様な寒氣なので、一同展望所の中へ駆け込む、かくして海拔一万呎のハレヤカラは、ホル、柳人によつて征服されたのだ。

御來光を拜す

煙 波

ハレヤカラは布哇語で House of the Sun といふ意味だそう、日本人はこれを日の宮と称してゐる。海拔一万尺以上で布哇第三の高山である。山頂には約百人位收容の出来る石室があつて、東方は総ガラス窓になつてゐて、所謂御來光を拜むことが出来るやうに設備されてゐる。一行が此處に着いたのは午前五時半であつたが、生憎全山雲霧に覆はれて展望叶はず一同を失望せしめたが、山登我々の志を嘉みしてか、丁度午前六時、展望所前面の濃霧の幕を左右に押し開かれ、燦然たる御來光が我々の前に現はれたので、皆々深き感銘を以てこれを拜し、此度の吟行の目的が達せられたものとして一同大喜びであつた。偶々その日が四月廿九日で、天皇誕生日だったので、馬哇島全体に響けとばかり天皇万歳を三唱し、齋す所の「沢の鶴」にて祝盃をあげた。

名物の銀草を見るべく此の石室内にて與太を飛ばしつゝ待機してゐるが、いつまで待ても雲霧の霽れる見込が無いので遂に割愛して下山した。

銀草は雲井の奥へかくれて居ちつとしては居れぬ寒さも愉快、雲の穴から一寸日の出の美し

下山



出でず靜かに下る國立公園外に休憩高山木草花やわらび茹りに興じクラ療養院に立寄る。ウルバラクワを通過十数哩の地点よりばるかに布哇島を望む予定も雲の祟動か

さを賞讃した馬哇の同人諸氏は絶頂より下界を見ることが出来ぬを残念がつてくれた。帰途も脚下の雲千疊ヘットライトの光線数尺を

心盡し山海の珍味に舌鼓を打つ酒興盛り上るのぞ自慢珍談爆笑、偶々釣自慢となるや二年の眼昔下モロキネ島附近にて魚釣中風が出て浪高く顛覆遭難一人助かり三人溺死をとげた椿事の詳細を潮風君よりさく鏡の如き湾内ありうべからざる椿事を追憶した高山病にて意氣銷沈の快夢起氏も稍々元氣となる。横山氏の農園を訪い、桃枇杷などを頂き感謝して帰途を急ぐ。

ピクニック 蔵狩

三村よし子

ウルバラクワ高原にて、馬哇ホル柳人合同のピクニック式晝食。早い朝食数時間の乗車後なので皆空腹おびたらしい。満面に笑を浮べ大きな口を開けてバクツクあたり実に罪のない姿であつた。三々五々といへる放牧の馬を前景に、ラナイ、カハラ、両島を眼下に見下した展望と、のんびりした環境は皆の食慾をそゝるのに充分であつた。團長さんすげない顔色で、写真機片手にパチリ、幾らか気分爽快になられた様だ。満腹感に幾らか落ち着いた氣持で再び車上の人となり蔵狩に向ふ。次から／＼と楽しみつゝ、摘んでゐる中に、忽ち手一杯になつて、思はず子供の様にはしやいでしまふ。道の両側にこれ又摘まずにいられない様な美しいアクレクレ花が爛漫として咲き乱れたのを見ながら一部の人は坂道を枇杷山に。今日程田舎でなければ味はえぬ楽しさを満喫した事はない。

ホノル、帰着まで

快夢起

馬哇柳友諸氏の熱意の籠つた見送を後に機上の人となつた一行は昨朝の上下動飛行とは打つて違つて平穩なのに微驚をあげた。誰かに「一では不働事旅行よりも遙かに樂だ」と云はれる。

往航の際に思はぬ不覺をとつた自分は今度こそ出迎への人達の手前もあるので飽くまで慎重の態度をとり用心をさ／＼怠りなくとあつて、席に着くや靜かに觀念の眼を閉ちて居たが予期の上下動が一向やつて来ないのに忽ち持前の元氣を取戻し、オアフ島の燈光が見ゆる頃になると「こんな調子なら此ま、嶋を一周して貰はう」だの「ホノル、へ着いたら何処かで解散式だ」のと盛んに怪氣をあげたりして皆が冷かされる。機が金剛峯を回ると右手に美しいホノル、の夜景が展開される東西十数哩、海岸から山手へかけて一面の電燈飾、その間に明滅する赤青のネオン燈、空からのホノル、夜景がこんなにも美しいものとは知らなかつた。

富貴説明・前列左から市川曉舟・古川慶花麗・古川令嬢・築山映夢起・竹川河舟・茂木笑有の諸氏後列左から小田沙桃・王代勢輝波・滝純香・池田泉永・築山夫人・久我野沙・市岡令嬢・市岡夫人・古川夫人・林益丘・茂木夫人の諸氏

停電

ラジオふど止りて闇の廣き知る

停電へ佛のマツチ借つて来る

貰うもの貰へばそれきり附添婦

泳がない妻へボートの空くを待ち

浮氣してゐてもきつちり見舞に來

履歷書より顔の綺麗な方を探り

大胆に焼香済ます第一号

級長の哀れクラス会え出す

無縁佛に妓はちよつと手を合わせ

生き抜く氣街の女と言われても

子の事は友が氣にする共隊ぎ

ワチお金持つてえへでど付て来る

馬鹿な事だけ一人前の男なり

間違いを秘めて夫に良く仕え

折詰めの歪みも痛い二日酔

手土産も無駄で履歷書戻つて來

戦后派は別れ話しへためらわす

誘われて誘つて浴衣いゝ歩調

身に合はぬ羽織で弔詞申しのべ

姉さんの好きな人來る急を告げ

共産党

先代に勝る手腕を危がり

こめかみの青筋酒に吞まれ出し

箸もつたところも外人写される

初恋の人の名も出る倦怠期

ソブラノを聞いてる方の首ものび

乳母車押してる方が眠くなり

街角に待つ娘マノンに似た容姿

ビーナツのコロリ昨夜の恋憶ふ

青麦に仮面を脱いだ人で佇ち

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

津田 千舟

水谷 谷水

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

磯部 白砂

昇給の額へ轉宅するぞ決め
千切つてはキセルで喫んで恋が逃

口喧嘩しても矢張り好きな人

興奮はたばこの灰に氣がつかず

類焼のあきらめきれぬ風が吹き

そらとぼけしても療養見逃さず

タイプ程浮世の吐が出来て居ず

父チャンを探させて居る写真帳

老らくのふと興醒めた家族風呂

お愛想に貴女も如何といふカメラ

山峡の湯に白き肢休くねらせて

遠足の列を乱した岩清水

なぎさまで走つた子らに手招かれ

母ちやんを決勝点にして走り

番附から糸へん泥の如く失せ

入獄迄も経歴の中に入れ

女給さん飲ませ拂はせ追つ拂い

バイバイの仕方相当仲よかる

輕装で失業保険取りに行く

朝鮮語の雄弁へ車内静まつて

女房にも駈引きがありおごられ

清貧だ等と無能を棚にあげ

娘の頬がビク／＼揺れるバスなりき

色街へ通じる道に思案橋

氣が向けばやると約束してくれず

よく笑ひよく泣き娘肥えてゐる

村会え料理屋離れ掃除する

野球しに白線二本巻きにけり

或日は女生徒の自轉車の尻で帰る

鉢を手に百万円の話をし

兒童と言はれる身で松竹の大映の

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

堀内 曉風

久家代仕男

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

武安 嘉彦

ると居眠つて居た見張りの百姓が、オヤ
ツと覗くと此の始末だ。「おのれかつば
め」と大声を掲げて人を呼ぶと、ドヤドヤ
ドヤと寄つて来る百姓連中、勿論河童は
血の水も荒れた爲めこぼして、グニヤ／＼
の荒縄胴中縛り、大勢前に引すえられ
た。

「太一郎野だ叩き殺してやれ」と息まくの
ゑ待て待てそれよりも町え持つて行き、ぎ
やあたろうの見せ物にすると銭が貰える」
と云うもの、ガヤ／＼ワヤ／＼協議の末
信心家らしい老人の説で、今後いたすら
せぬ事川を守る事、かんばつ、洪水の時
も農作物を守る事などを約束させて、放免
にしてやる事に決つた。それにしても口約
束ではいけない、証文を入れさせると云
事になつたが、河童は字が読めぬと云
けぬので、読み上げて、判を押させる
ようにした。そこで老人が読み上げて、判
つたか、判つたかと念を押すと、河童はベ
コ頭を下げて居るので、判つた、そう
な、それではこゝえ手形判を押せと矢立
の墨を塗つた手を、ベツタリと押させた。こ
れで無事故放免かと河童もほつと一息して
居ると、どうしてこれだけではなかつた。
それは子供でもいたすらをする、叩くと
か、灸を、この河童もこのまゝ罰のな
いの、いけないと一部から論が起り、そ
れももうだ、罰に灸をすえる事に成つ
た。わやわやがや／＼の中に太い線香と大
きな紙袋え、ギツ／＼詰つた、もくさ取
り寄せられ、四五人手が足を押さえて、第
一灸に点火した。河童は、もがいた。第二
灸には泣いた。第三灸はストライクと云う時
に、点火係が、「これはたまらん」と顔を
そむけた。手足を押さえて居る連中も「や
あ、眼が霞む鼻が痺れる」と騒ぎ出したあ

痴漢にならずとも一瞬痴漢の目
奥の手を使つたはすが又孕み 貝塚市 望月 鮎魚
百万の詐欺で屋台骨ちよつとゆれ 同 同
更生を鼻で笑つて客を引き 同 同
今日からの日記も妻と呼べる文字 奈良市 宮口 笛生

白濱温泉へ新婚旅行

倅な靴二人の加工壽し 同 同
猿沢の柳に相合傘で触れ 同 同
他人の恋とやかく言つて病む日永 貝塚市 齊藤 一蝶
つゝましく本を読んでる性病科 同 同
見合写真へ難癖つらゝガムを噛み 同 同
追放がとけた親父はすでに老い 倉敷市 野田素身郎
追放がとけても八百屋まだする氣 同 同
失敗も苦にはならない程にすれ 同 同
貸している方も食えないとはから 山口縣 岩本 徒子
悔しいが利財の才は俺の負 同 同
端境期の畑へ母のそそくさと 同 同
ヌード集母はこの世がおそろしく 貝塚市 香木凡太郎
期待する兒が車掌になりたがり 同 同
サンダラス夜の酒場へ現はれる 同 同
ノツツリとノツツリとがま月え這ふ 愛媛縣 村上 旭童
役得に皆いひ訳があるのなり 同 同
場違いを知るやしらずや話好き 同 同
叱られぬ方へ子供は泣いてゆき 岡山縣 田垣 方大
長女もう妻に似てきた叱りやう 同 同
浴衣地へあらなに妻ははしやいで 同 同
先代の遺した碁石数足らず 岡山縣 岡田 夜潮
嫁きおくれ田植の列に淋しくろ 同 同
桐原鉦山見學
どの山も谷も社宅で威勢見せ 同 同
追放解除
再出馬既に天下を呑む氣概 東京都 松井 蛙声

廣告塔壊して仕舞ひたい暑さ
バレリーナあくびも何か型があり
九州修学旅行

もう汽車はこゝろ顔で門司へ着き 岡山縣 水田 草骨
蹴り合つて楽しい旅の宿にねる 同 同
旅の宿さかさにねてた子があわて 同 同
マチスピカソ讚めて斗りの美術論 石川縣 山田 陽々
薄ものになり肩の線腰の線 同 同
独特の押しの強さでのし上がり 同 同
ひふみーなーがいな貨車がくる 大阪市 横田 方眠
冷やつこ今日のつかれもみな忘れ 同 同
晩酌の合ちびく老けてゆき 同 同
妬くことも堂に入つてる倦怠期 荒尾市 山崎青粒子
遊廓の二階が見える二階借る 同 同
毒草の花も咲いてる春はよし 同 同
煙突の高さだけまだ村で一 岡山縣 太田 又州
九州旅行
何事ぞこの絶景へ落書し 同 同
ガムを噛み乍ら温泉地獄を見 同 同
口紅のない顔なんぞ寂しさう 大阪府 森本黒天子
朝風呂の湯さめ会社の椅子で知り 同 同
家出フト我が人相が氣に懸り 同 同
うろたへた顔が募金へつき当り 尼ヶ崎 赤木 紅山
マージャンへ二十才の春の無駄使ひ 同 同
喫茶店我老いたりと見て通り 貝塚市 坂東 冶
古つらおばあちゃんレターも出 同 同
ウインドえ妻置いていく春の宵 長崎県 北川 史風
トラックの候補者雨に濡れて見せ 同 同
人も亦盛りすぎれば誰も來ず 今治市 長野 文庫
留任をせよと男が云うお世辞 同 同
三日目は早や連れ戻された家出 貝塚市 河楊 梵鐘
命冥加は國電に乗りそこね 同 同

たりの見物衆も鼻をつまんだ。映画家快三
勇士の月形が扮した何やら兵衛が、足を掲
けて、映画界始めての音を三回鳴らし
た、あれである。河童のは専賣特許独特の
「あれ」であるから、あたりを、くらくら
にするのは、当然であつた。時に享保十二
年の夏、(この秋には伊予地方を襲つた風
水害、虫害で、きゝんと成り有名な義農作
兵衛が出た。これが原因で松山騒動も起つ
た。こんな歳である)河童は、やつと放免
になつた。お尻にお灸のあとを付けた爲に
には河童の尻を輪を挿く事になつた。そう
な放たれた河童は川中え、ドアン……、泡
玉が次々に浮き上つて来る。泣いて居るの
か笑つて居るのか泡玉は続く……
「踊りたい河童農村ダンスの灯」
(終)

二階

吉田水車

課題吟の出題ではありません。無声映画
はなかなかなりし頃のいともいふ、じき物語り
です。をよそ目玉の松ちゃん、の盛の頃を御
存知の年輩の方なら「アハアン」とうなづか
れるのに違ひありません。今のうちに何巻
あらうとアツ通しに映写出来るのところが
その頃は一巻一巻かけ直してをむろに写
し出したものです。それがどうかするとフ
イルムの一胸がすれて三分の一位上下にな
るので上の方は足だけが、チラチラしたり
下の部分はからだの半分が写つたりするの
で、つまり画面が半かけになる、それを
「二階だ二階だ」と観衆が叫び映写室へ注
意するのです。するとそれ迄気がつかなか
つたのか、知つて居ても横着をきめ込んで
居たのか判りませんが、あわて、ヒントを

大阪にて

オフヒース畫尙暗き椅子に座す 出雲市 小倉へとち
バイヤーに同行して

名刺みな株式会社社長なり

同

お米の値位覺へて置きなさい 高田市

岩垣日本村

男の子捨てたトンボに首がなし

同

飯だけはよばれて戻るロハ仕事 宮崎市

野口卯之助

他人の世話ばかりしたがりが叱る

同

役得の酒でチョツピリすきを見せ 今治市

黒川 秀義

デパートで初めて知つた子の節句

同

子が出来ぬ罪はお前だいや貴方 堺市

丹波 太路

常識に逆ふ 北浜 面白く

同

鹽から百円札をツマミだし 奈良縣

平井 良兒

上役の背なかへ阿呆と張りたけ

同

手おくれがキリストの額壁にかけ

小山 彌生

逢ひ曳きえ場末の喫茶えらばれる

同

税務署を帰へす奥の手唆をする

具塚市 高梨 晴風

子の死ぬる度に手遅れ教へられ

同

三輪山は岩も立木も神懸り

大阪市 佐野 牛歩

市民税あれだけあれば服が出来

同

この奥にバツハかけてる喫茶あり

具塚市 新城於久良

遊覽バス橋も名所にして渡り

同

丸刈りもチックの時代あつたがな

愛媛縣 青野天下堂

出嫌の母が勇んだ入學日

同

風邪で伏す今日を新聞四頁

下関市 中村九呂平

降るもよし降らぬでも箱根にゐ

同

縁起でもないこと言つて勧誘し

具塚市 橋本 安木

間違つて先妻の子を賞めて居た

同

待たされて居るへ暑さは容赦せず

愛媛縣 田村 孤峰

話もう聞かぬふりして毛糸編む

同

潮干狩りはかにばかり追つて居り

岡山縣 井野 格一

ボーナスが決まらぬ先に飲んで待ち

同

灯を点けて橋は夜更けへ妖氣めき 具塚市 岸 まさる

あんな男と言ふた男と歩いてる

同

ままならぬ妻の体重びんと跳ね

兵庫縣 酒井ひかる

長靴をはけば課長もやばに見え

同

赤貧に泣いた日もあり博士号

熊本縣 鹿本 実信

還曆も兼ねて追放酒を汲み

同

乳母車買ねばならぬ育ちよう

岡山縣 梶原 一善

食ふだけはどうかになると母を

同

湯につかりたまには故郷の母も

東京都 田中 稻水

五百助になつてもみたい金詰り

同

千金を夢見た末路死が待てり

石川縣 塩谷三思楼

押賣へ妻の遁辞は慣れたもの

同

百姓の六月顔の髯が伸び

岡山縣 池田 古心

一万円明治天皇の持つたかさ

同

薬瓶さげて喫茶へ寄つて来る

具塚市 池崎 箕水

新築のカーテンアロハにしたい柄

同

二三人しやべればそれですむ会議

岡山縣 浜野 奇童

もめるだけでもんだ俺は野党です

同

パチンコ屋孫の守じやと云ふ顔

具塚市 上田 耕平

氣の毒は相合傘の背の高さ

同

肴屋が呉れた團扇に鯛がはね

和歌山 岡崎 泰三

檀家来て鶏糞値ふみしてもらひ

同

向學心恋と云う字に邪魔をされ

兵庫縣 吉原 紅月

惜別のキッス口紅はげたとて

同

ビヤホール汗の匂ひも親しまれ

京都市 上村 春風

カムバツク昔のまの部長室

同

歩いてるだけで役目を果たす牛

岡山縣 大塚美能留

さん付けは妻となつてもまだ続き

同

空を見て傘又妻へ返される

京都市 藤原みてい

嬉しさをたもとへ仕舞ふは女なり

同

焼鳥となつて美事に散華する

米子市 由比 富郎

ノルモザン飲んで割勘の腰を据え

同

合はせやつと本調子になる。暫くすると又二階になる。先ず一卷済む迄はこの二階に留まされる宿命を持つたのが当時の観客であつたのです。

無声映画には当然説明者——活弁——が要ります。當の説明者は映画スターより人氣があつて、説明者の如何で客の入が左右されたものです。映画館——詳しくは活動写真館——の切符賣り場の窓の辺りへすりりと人氣説明者の写真額入りでかがつてあつたのもなつかしい光景でありました。その頃の撮影技術と言ふものは、シンブルなものであつたらしく、角度の変化等は思ひもよらず、すべて正面からの一本鏡で俳優も亦正面ばかり同じ芝居をして、出て来るのも突如として左右から、現れ又左右へ消えると言ふ式のものでした。

洋画と言へば「ナウのさ」波の伴奏で華ら風景ものばかりで題して「教育実写参考」てな眼で、ホンの短いものばかりでした。実は私が初めて見たのがそれで、清き何とかの流れにボートを漕いで居る一場面が印象的でしたのは水面すれすれで写されたので、その水が今にも自分の方へ流れて來るような氣がしてハラハラしたものでした。

洋画でトッキーの最初のものは——私の知る限り——リチャードバーセルメス主演の「飛行機一隊と言つたもので新世界の何とか館で封切りの時は椅子が全部メチャメチャと言う程の入りでした。内容は何の事はないアメリカの軍事宣傳映画で、編隊飛



日曜の雨を樂しむ良い家庭 京都市 村本 小石
 水薬のにぎり床上げする氣なり 同
 名刺よりチツプを先に頂戴な 愛媛縣 八塚 紫邑
 口髭も時にはおつちよこいに見え 同
 妹の絵具間に会ふ地藏盆 京都市 佐久間折草
 借金はまだ返せないお人好し 同
 鶏しめる役に招けば三つ揃 愛媛縣 砂田 島青
 慰謝料も男に不利なまゝ決り 同
 愛人の子におぼちやんと呼ばし見 愛媛縣 村上 和子
 船底はみんな寝て居る夏時間 同
 學藝会我が子に思はず手を叩き 出雲市 原 一月
 サービスはここで終りと捨てキツス 同
 境内を借りて建てたわ小料理屋 鳥取市 森本法泉水
 兵隊の頃がよかつた不しあわせ 同
 白ばらのとげ遠くから見えません 熊本市 花岡 英子
 客の子のいたづらだから笑つて見 同
 久し振りのやつぱり愚痴る女にて 貝塚市 多炭 若柳
 わびしさと云ふ旅先のストリップ 同
 母がわり娘がかりを知らず過ぎ 大阪市 中谷葉菜子
 初孫の湯へ姑が世話をやき 同
 遅刻せぬ注射を打てと叱られる 大阪市 東 喜久堂
 外米の石を撰るにも不満なし 同
 もう少し剃つて、欲しい、ラジヲ 大阪市 三木 泡起
 しかられに行つたアメリカ風吹かし 同
 ギター抱く義足に恵む力なく 大阪市 長田 塗杖
 球数を繰る母の白毛を盗みみる 同
 百姓はせぬ筈だつた嫁は去に 岡山縣 河島 露外
 あり余る金もないのに妾沙汰 同
 食ふために濡れてこゝまで来たのです 徳山市 徳重 馬笑
 電源が降るので今日も飲んでゐる 同
 妻の咳お医者さんより怪く聞く 熊本縣 西野斗四翁
 遺産だと名づける程の柄でなし 同

新世帯机なんども向きを変え 岡山縣 西山 秀峯
 鯉のぼりやめて我が家の上に居る 神戸市 飯尾寄與史
 医者云くもうお齡だご更年期 高知市 松下一徹郎
 自己評價掛値が多い女なり 大阪府 青柳扇子仙
 田植などする氣で嫁に來たけれど 愛知縣 松尾 北雷
 網棚に忘れて來たよ弁当箱 愛知縣 尾崎 久平
 うつちのゲームに外野手まだ走り 岡山縣 北口 草人
 養生のためなら云ふ眼もつむり 水ノルル 長田 大彦
 李承晚祖國を知らず盲判 水ノルル 白砂 旋風
 若い娘の荷は編棚にのせてやり 愛知縣 岩瀬 雨連
 飛びそうな家でも欲しい二人なり 貝塚市 堀田 羅漢
 あみ棚に帽子一つあり終電車 愛知縣 兼元 磊兒
 子に甘い父さん振りが非難され 下関市 伊織 柳坊
 女房に逃られ水薬うらめしく 愛知縣 太田 劍坊
 一人逝きがらり來つた子の躰 萩市 多田 穂波
 入墨が一人離れたお湯の中 下関市 加藤 司樓
 網棚の荷忘れまいぞ又忘れ 愛知縣 平岩寛太郎 稻美
 心よく水にひたりて鳴く蛙 荒尾市
 役員もしばし見とれる女騎主 岡山市 山本 焦兒
 初対面縁の風のそよぐ下 池田市 太田 木声
 網棚に母が手織の單衣物 愛知縣 山下太郎 和尙
 番台は眉毛のうすさ知つてゐる 京都市 西村 和尙
 闘争へ青年部だけ氣が強い 富山縣 田又 壽郎
 泥棒も背廣姿と言ふ世相 京都府 若草 圭草
 意地ですつてと辞表の若さ笑ひ 今治市 柴田 青雨
 ボロ浴衣病と闘ふ臭ひがし 岡山縣 田中 敬實
 勤務振り整理と聞いて改まり 出雲市 石橋 齊兆
 小成に甘んじて居るいゝくらし 岡山縣 葉山 縁二
 行水の女きちんと下駄をぬぎ 米子市 小西 雄々
 恋語る上で螢は明滅し 大阪市 永田六童子
 月給も安いし彼女も出來ぬたち 吹田市 橋本 幸男
 特價品身に合はないとくやしがり 大阪市 西川 惠風
 結婚も離婚も役者派手にする 大阪市 木村 水堂

行の場面が一寸出るだけ、しかもその爆音のみ録音されたもので、今から思うとトーカー映画と言へた義理のものではなかつたのです。しかし當時は當時なりに日本映画も大いに発展して、時代ものの新派ものと次ぎ次ぎに出て、新聞ものでは朝日の修羅八荒が各聖競映で、新派の方も大地は燃える等満都のフアンをうならしたもので、内容に単純と言へば単純ですが、今のような変に理くつ張つた肩の凝るものではなかつたよ、です。以上ざつと拙い思い出を記しました。(五・一六記)

僕も昔を語る年となり
 看板の絵にも目玉の紋所
 猿ばかり退治る尾上松之助

支部新設紹介

川柳雄悲社説聞支部を開設した。
 幹事は不朽洞会員大西迷窓氏(香川縣三豊郡詫間町永康病院理血清室)

◎社の黒板

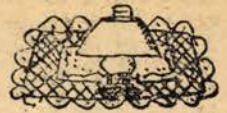
川柳千日前連
 絡所はサンマ
 タイムの期間
 中月・水・金
 の午後三時か
 ら六時まで詰
 めて居ります
 からせいで
 お立寄り下
 さい難波東大
 劇の四ツ辻南
 へ直ぐ東側小
 路の中程、べ
 にぼたん階上

山之内

避妊の為に 確実に

サンシー

セツト 250円
 セリ 205.90円
 同上 50.180円



不朽の洞室煙喫

云ひいた事を云へう
（順着到）

須崎豆秋

喫茶室だつたら没になる心配な
いと、するいことを考へついで、
（失礼ですが）もて余していた句
を
服脱いでヤレ／＼と屁を落

大阪の極楽

水谷 鮎美

毎月いちごは必ずお詣りする四
天王寺さん南無阿彌陀佛々々々々
先祖代々之靈柳人之靈魚族之靈の
経木に合掌して流した私は天を仰
いで極楽へきた心持あかれ雲は錦
に暮れゆく。こゝから程近いアベ
ノには梅里さんの大万があり豆秋
さんのパチンコがある。

四天王寺についで極楽灯がとも

動 静

▼本社句会は
七月七日午後
六時半から大室文化会館三階で開
催▼川維北大阪支部は七月廿九日
午後一時から箕面滝安寺で開催▼
大阪通信病院川柳会は七月廿一日
午後二時から五階講堂で開催▼川
柳一路句会は七月十二日午後五
時半から高島屋飯田株式会社で開

催▼南区医師会文化部川柳同好会
は七月廿四日午後七時半から三休橋
の生々庵居で開催▼南海電鉄川柳
部（大阪市）主催の電光ニュース見
学川柳会は七月十二日午後五時から
毎日新聞社及本社後援の下に南海
電鉄集会所で開催当夜の路郎選天
位小川恒明氏の「夕刊えならんだ
頃のなつかしき」の句が即夜大阪
の夜空に輝いた詳細次号▼南海電
鉄川柳会は七月廿五日午後五時半
から高師浜、南海高等学校階上で
開催▼京阪神市電交歓川柳会は七
月廿二日午後一時から天王寺運輪
飯泊所で開催、以上何れも路郎主
幹出席▼川維京都支部句会は六月
十六日仲源寺で開催▼川維岡山支
部句会は六月十六日弘済会ハウス
で開催された▼川維備前支部句会
は六月九日午後八時から久米雄居
で開催された▼北川春巢氏親迎句
会が七月十三日午後一時から大阪
市交通局病院会議室で交通局川柳
会が開催▼さつき川柳社（大阪市）
では七月一日同人会を開催▼緑雨
居小集（大阪市）が六月十七日に
催された▼警察創作展覧会（岡山
市）が天満屋百貨店で開かれ七面
山氏の川柳も出品された▼玉野
市主催川柳大会（岡山縣）が川維岡
山支部後援で七月二十二日瀬川海
水浴場で開催▼川柳不二見吟社

（栃木市）では誌上競詠大会作品
募集をされている題「場所」鈴木
宗満選ハガキ一人五句、〆切八月
十五日栃木市錦町一、黒田軟扇子
氏宛▼福岡葉留路氏（廣島市）は
竹原駅長在職時代に「竹原川柳
史」を執筆、廣島鉄道局機関誌
「ひろしま」の四月号に発表され
た▼故清水友帆七回忌を迎えて追
憶集「はるの涙」が七月一日発行
された非賣品▼山本十四郎氏（高
知）が六月廿一日に永眠された謹
んで悼む▼遠山夏生氏は熊本縣水
俣市肥後銀行支店長に榮轉された
▼仲本玄同子（岳仙）氏は六月十
九日、廿四日、大丸五階で開催
された矢野橋村塾の主潮社展に出
品された▼松島みどり葉氏（石川
縣）は津崎町で旧同志を集め近
く川柳会を組織すると▼七月号川
柳塔の山田秀替は山田季賛と訂正

中島生々庵

大阪市饒谷仲之町二〇
電話 南三九八四番

耳鼻咽喉科 羊田病院

院長 羊田 哲三郎（哲）
大阪市南区長堀橋交叉点西・電話 船場五〇〇〇番

暑中御伺

（柳人交歓のページ）

戸倉 普天

兵庫縣米上郡沼貫村
宇小野

須崎 豆秋

大阪市阿倍野区旭町
三丁目一四

木下 幽王

大阪市阿倍野区帝塚山
西一丁目十一番地

勤務先 タイロ産業株式会社
電話 新町一七〇七番

西尾 栗

大阪府中河内郡曙川村宇
八尾木 電話 八尾一七三番

大坂 形水

兵庫縣津名郡
志筑町二八四三ノ一

澤田四郎 作

小兒科・田沢医院

大阪市西成区玉出通一ノ三

川柳日の丸会

後援會

會長代表取締役

上山 専一

鳥取市東品治町五二番地
日の丸自動車株式会社内
電話 鳥取一二三〇（代表）
自一二三〇番
至一二三三番

大阪へ帰つて來ました
どうぞよろしく

北川 春巢

大阪市北区東扇町二一
大阪市交通局病院内科



武藏坊弁慶 (上)

富士野 鞍 馬

武藏坊弁慶という怪僧は一休何歳位であつたのかと、生れ年を調べてみたがわからないう。われ／＼は能や芝居などで見ると位しか知らないのであるが、この怪僧をこしらえあげたのは足利時代の謡曲であつた。

「義経記」には熊野別当湛増の子とあり、「弁慶物語」には熊野別当弁心の子とあり、「謡曲集葉抄」には紀州岩田入道寂昌の子となつていて、新宮に弁慶の生地と伝えられる所もあり、まづ紀州熊野別当の子といふことにはしておくことが妥当のようであるが、いつ生れたのか不明である。幼い頃「鬼若丸」といつて播磨の書写山の田教寺の稚児であつたことが、浄るりの「弁慶上使」に書かれて、「阿和佐」といふ女と一生一度の契りを結んだことになつてゐる。その後弁慶は女を知らなかつたことになつてゐるので次のような句がある。

へんてつもないと弁慶それつきり
(タル五八)

じゃによつて弁慶至極無病也
(タル八七)

弁慶が伴けんごに出家する
(タル四二)

天晴な貞男これは武藏坊
(タル一〇一)

この道はもうこれきりと武藏坊
(タル一四)

静謐の世なら弁慶國家老
(タル八五)

武藏坊終り初もの一つきり
(末三)

むけ給う水弁慶は一度きり
(タル一二六)

この句の「水」といふのは精液のこと、
(タル一〇三)

金よりも水がほしいと隠居ひひ
(タル八〇 末三)

という句もある。
(タル一〇三)

この一生一度に因んで年に一度位より來ない客を詠んで
(タル一〇三)

弁慶や七夕廓でいやがられ
(タル一〇三)

又小野小町の穴なしと並べ
(タル一〇三)

て次のように詠まれている。

弁慶はせめて小町はからむたい
(タル一三)

弁慶はまだしも小町からむたい
(タル四二)

小町さと人を茶にした小弁慶
(タル一四〇)

弁慶はいゝが小町はおいしいもの
(タル一四二)

「須磨寺の花には指もさゝぬなり」と古句にあるように、須磨寺に「弁慶若木の櫻」があり、その側に「一枝を折れば一指を断つ」と弁慶が立札したといわれて

弁慶は心ゆさせぬ札を立て
(拾五)

指を切ることも弁慶一度かき
(タル四〇)

という句も見える。

「水際で藤太みやげに大こまり」と詠まれているように、三井寺の鐘は、依藤太秀郷が竜宮からお土産にもらつてきたと伝えられ、それを弁慶が比叡山へ引摺りあげた爲に、ひびが入つて鐘の表面が摩滅してゐるといふ俗説がある

ので

弁慶のわるさで時が知れぬなり
(タル一二)

鐘の外わり物をせぬむさし坊
(タル四二)

弁慶にわれれ鐘つんぼうになり
(タル四八)

弁慶が割つたは三井のおかれなり
(タル六六)

弁慶の力でいぼを落すなり
(タル七六)

暑中御伺

(柳人交歓のページ)

川雑東京支部

川宮植植石武加田清福
村田田田居田藤中水
好二郎 千東 高志 登志 守夫 稻水 一雨
山雨楼

川柳雑誌社篠山支部

兵庫縣篠山町

家沢 薺花
小島 無聖
酒井 ひかる
小西 無鬼
田代 尋四

川柳日の丸会

会長 加嶋 卜天

鳥取市富安町三八〇
日の丸車体工業株式会社内
電話 鳥取 一五三三番

川柳雑誌社

備前支部

月刊ながさき

池田 可宵

長崎市新大工町五
振替口座長崎二四五〇番

弁慶が引すり上げる鎖の下

(一〇三)

三井の鐘弁慶の夢見てうなり

(一一四)

弁慶のために一景たえると

(一四九)

三井寺の晩鐘は近江八景の一つである。

京都の清水観音には、大きな鉄の高足駄と錫杖が今でもあるが、これを弁慶が履いて日参したといわれて、その高足駄が減つたようになつてゐるのも面白い。

謡曲などでは西塔の弁慶が毎夜五條の橋へ出て千人切をしたといふことになつていて、その千人目に牛若丸に出会して従者になつたといわれ、物語、芝居等で日本人の誰もが子供のうちから知つてゐる。

平家から檢使にあきる五條橋

(拾五)

牛若のさやえさわつて飛上り

(六)

けつ若衆めがと弁身こしらえ

(タル三九)

五條橋足駄をわらじもて余し

(九三)

牛若は左官さいとり武藏坊

(一一一)

「牛若はどこえゆくにも足駄がけ」で弁慶は草鞋履の大長刀といふことになつていて、相当年寄にされている。尙次のような句もある。

弁慶も千人目には食につき

(武四)

弁慶も何ごにありつく橋の上

(タル四九)

七條をぬいで五條で主をとり

(六五)

弁慶は五條の橋で主が出來

(一三〇)

七條というのは袈裟のことで五條橋鞍馬天狗のひんのよさ

(タル八〇)

牛若丸を鞍馬天狗としてゐるのも愉快である。

五條橋の事件はいつ頃かわからないが、これからの弁慶は、義経の従者としての活動になり、文治元年十月十七日に義経の堀川邸は土佐坊昌俊に襲われ、翌十一月義経の西國行に弁慶も従つて、淀川尻の大物浦から船に乗つたが、

平知盛の怨霊に追われ、疾風逆浪に遇つたので、弁慶の祈禱で浪がおさまつたが、遂に西國行は中止した。これは「船弁慶」として能、芝居でよく見られる。この時義経の愛妾靜御前を弁慶が船に乗せなかつたことを川柳は逃さな

い。

舞のうち弁慶は出て船の世話

(タル一一)

武藏坊やつとおめかを引きはな

(タル四)

弁慶が居ぬと静をのせると

(七一)

この時靜は十八才、義経は二十才、弁慶は恨まれたであ

らう。

義経はお好き弁慶さらいなり

(タル五〇)

靜に小舟弁慶は野暮だなア

(一一八)

大物浦では弁慶も余程苦心したと見て

大物は実に弁慶も手に余り

(タリ一四一)

へぞをふみ／弁慶はいのるなり

(一一)

艘かき船弁慶は又新り

(一一二)

知盛をしやばんのようにいのり

(拾五)

白浪になつて弁慶汗をふき

(七)

怨霊はきえて源氏の浪になり

(七)

「平家物語」や「源平盛衰記」には、三草山の戦功、一の谷の活動など書いてあるが川柳には詠まれていない。

瓶の銀山

大坂市大坂區長橋
西通一丁目四四
山銀株式会社
電話堀川西四七番

体温川柳会

有志

貝塚市名越 千石莊

川雜説聞支部

大西迷窓

香川縣三豊郡詫間町
永康病院病理血清室

川柳雜誌社

岡山支部

(岡山市下出石町六二)

不朽洞会員

浜田 久米雄
鈴木 九坡
大森 風來子
藤本 満年
藤本 茶々
大森 娛句樂
延永 忠美
大倉 四案
大森 苑女
外会員一同

南区医師会

川柳同好會

藤原 虛水
田中 烏耕
中島 生々庵
木村 無名林
河村 瑞川
牟田 一哲
黒木 彈正
南 捨舟
長谷川 迷路
安岡 珊枝郎
海野 毅
浅野 春路
和佐 上六



川柳漫釈

小畑自由朗

「伊藤はん、北海道のお父さんからお電話だつせ」
「ひえッ、あの北海道の親父から」
「まあ、あんな遠い処からでも電話がかゝりまんのんか」
「あほ、そんなことよりわえの下駄がないしんやいな」
「あッ、今朝洗うて物干にほしたまゝだんねやがな」
「しやあない奴やな」
「何んなどとはいて早う行きなばらんかいな」
「それが何んにもあらへんのやないかい」
「あれッ」
「ありや、停電やがな」
長距離電話へ下駄が見當らず

(迷宮)

「あら、アーさん」
「い、い、い」
「此の涼しいのに、上着やないかいぬいでございしやはる氣だす」
「い、い、い」
「さあ、熱いのが来ましたで」
「お前もぼつ／＼上着をぬいで長じゆばん一つに成つてちいしくつ

ろいだらどうやれ」
「あてストリップと違いまんね」
「ハツクシヨイッ」
「それ見なはれ」
上着ぬいだ顔を浮氣ツボク見られ
(一杉)

「いや、兎に角もう一つべん調べ直してもらいまひよ」
「そんなこと云いなはつたかてあんだ、これだけの人間が開票に立会つとりまんねやさかいに」
「せやかてあんだ、わしとこは家内の者だけども六票おまんねやで、それにわたえの得票数が五票やなんて、そゝそんな阿呆氣なことがおますかいな」
本人も入れて五票で村邊落ち

(玉兎)

「あんだほんまにえゝ妹やなあ」
「えゝ、あて、どうせお多やんだつさかいに」
よいからだほめたを女喜ばず
(宏方)

「あんだ」
「い、い、い」
「何故そんな方え曲るのよ」
「い、い、い」
「ね、こつちから何故行かないのあらッ」
「い、い、い」
「あんだ」
「い、い、い」
「あんだッ」
「い、い、い」
「ちよつと待つてッ」
「い、い、い」

「ねえ、向うのカフェから首出しで、こつち見て笑つて居る女の人、あれだあれ」
妻とする散歩カフェの前をよけ
(薺花)

「では、入学式を挙行するに先立ちまして、氏名の点呼をします。で、名を呼ればたら、高校生らしく、活ばつに返事をして下さい」
「はい／＼」
「谷内一郎君」
「はい」
「エーと、あんだは」
「はい、手前は谷内一郎の親父の太郎作と申す者でござります」
「で御本人は」
「はい、たしかにこゝえ連れて参ちとりますで」
入学式親が返事をしてしまい
(一草)

暑中御伺

(柳人交歓のページ)

川柳雑誌社ハワイ支部

ウィロー社

同人一同

川柳京都支部

(方松村) 四町如真寺土淨区京左市都京

平岩 司郎
今田 蘇海
井ノ下 晴牙
井ノ下 秀人
中谷 勝
村松 夢裡
大鶴 喜由
田中 鳥雀
田中 干潮
八木 迷々
藤原 和朗
長尾 案生子

日の丸川柳會

岡嶋 芳道
福田 たかし
羽野 朱雀
田中 遊星
河村 日満子

富士野鞍馬

東京都新宿区若葉
一丁目十五番地

川村伊知呂

大阪市南区桃谷町七一

一路集

煙突 高田抱逸選

煙突は景氣不景氣吐きわける
求職のしはし煙突見上げてゐる
煙突が高くて雷恐ろしくなり
煙突を目標に行くと致れ
煙突が大気を濁す文化都市
良き父として煙突掃除する
煙突に三日頭張るストライキ
煙突の高さ廣告無駄にせず
煙突が富士より高クレコン画
煙突へ通ひ感謝の日がつき
煙突の煙が上り株上り
煙突の煙見ながら税吏来る
煙突を傳つて雨の洩る借家
煙突が思ひぬとこえ出る間借り

煙突掃除士の人の真似もしてみせる
青空は特需景氣を煙むたがり
煙突が曲つた陸奥も今はなし
インフレもデフレも煙突りきまる
煙突の街で事務所の白い服
煙突がふへて飲屋も店を開け
煙突が佳作になつて写真展
飛躍する都市煙突にある自信
煙突を鋭角に避けつばめ飛ぶ
煙突が窓の視界を二分する
洗濯の下女に煙突にうまれる
煙突の火の粉危なく二階借り
煙突の位置が悪いを病んでおり
料理屋の煙突馬鹿な煙を吐き
煙突を尻目に風よく泳ぎ
煙突・四季美しき雲が泳ぎ
生産のコスト気になる黒煙
煙突の煤へ工場抗議する
煙突・煙も謙和の近い色
煙突の不覚一戸を灰にする

格 一人煙突へ泳ぎつくよな鯉のぼり
芳 仙 煙突の街から日本たちなおり
扇 子 仙 煙突の高さは女工哀史秘め
英 子 軸・壁死二人煙突無惨な真似をする
方 大 年 軸・壁死二人煙突無惨な真似をする
谷 水 正直を税吏はんとしてくれす
実 信 正直を誇る心の他びしい日
おさむ 住宅居子の正直を頼りとし
十九平 正直に二号三号白狀し
天 馬 正直が買われ残つた整理なり
界 坊 正直が儲けごころをふみ切れす
馬 正直が馬鹿と云はれぬ程に生き
太 一郎 保護室に正直しごころもごころなり
法 泉 子 正直も馬鹿と云はれぬ程に生き
九 呂 平 正直に言つて先生を憐れさせ
青 泡 慾のない兒の正直に教えられ
方 眠 正直に云へばと声が小さくなり
日 満 子 正直に云われぬ借も二つ三つ
五 醉 正直にしてゐる膝のまるくあり
波 鮎 美 軸・恐ろしい父子の正直をためらわせ

正直 武部香林選

停年になつて馬鹿正直を知り
正直を買われしがない職につき
正直に云ふ氣二本目のお釣
正直で通しつんぼを徳とする
飲んできた日の正直を疑られ
嘘云へぬ自分に腹の立つ日なり
正直な女へ魅力湧いて来す
その男正直すぎて首を吊り
正直に申告をして牛を賣り
働きに出た正直を笑われる
正直を誇り貧乏しいます
不機嫌へつい正直にいいそいれ
正直に云ふてしもうてうまい酒
半日を警察に居た拾ひ物
日 満 子 慾のない兒の正直に教えられ
方 眠 正直に云へばと声が小さくなり
日 満 子 正直に云われぬ借も二つ三つ
五 醉 正直にしてゐる膝のまるくあり
波 鮎 美 軸・恐ろしい父子の正直をためらわせ

「つしやない」
「はい、今おつとめをしよりまし
たらな、木魚の中から這い出して
来よりましてな」
「危いこと、早うぶち殺してしま
いなばらんと、逃がしたら大変だ
つせ」
「いや、これも佛機、裏の山
え逃がしてやろうと思ひまして
な」
「あな様か、而し、百足を桶油え
漬けとくと、え、傷薬に成りま
れやけんぞな」
「ほう、それは、こつと、
うちにも桶油なら少々有つた筈ぢ
やが」
僧正に虫はつまんだまゝおかれ
(山 布)

「丹波さん」
「うん」
「いよ、再軍備らしいぞすな」
「うん」
「又其のカイセル髭に物を云わし
て見ますかな」
「はつ、守衛ちや商賣も
呑氣でえいことはえ、んぢやが
喃」
口髭にまだ夢がある守衛なり
(太 太)

してもらつて役得にありつこうか
な」
「ほら、此の目鏡の位置で注視す
べし」
「あ、成程、うわー燃えてる燃
えてる」
「あんな奴にこそ消防車を出して
頭から水をぶつけてやる必要が
あるんだぞぞ」
「いや、焼けて居るのは却つてこつ
ちかもしれねえからな」
ラフシーンを見て居る消防監視臺
(豆 秋)

求 住宅・四〇マデ阪神間
又は南海
川 雄内の子

川路姫支部

夷 狩 武 大 木 荻
一 野 田 川 下 原
笑 燕 孤 笑 和 二
葉 子 笑 鬼 水 葉

南海電鐵川柳部
阿 形 一 杉
菅 信 郎
友 淵 貴 山
山 田 鳥 莊
後 藤 竹 石
森 本 黒 天
赤 松 てる
保 田 喜 昇
出 波 野 傳 介
雨 乞 い さを
雪 野 博 史
水 本 無 人

同舟近詠

松山前田伍健

記憶の扉ひらくしばしの眼をつむり

旅愁とは遠三味線えちらく灯

衣食住足りぜいたくな倦怠期

風格にされる弱点名士持ち

大阪橋本緑雨

見送つてくれるうれしきにだまされる

注射してる腕を女は見せるなり

服買えの靴買えのと云ふ娘もおらず

相談を廊下でしてる女事務

金沢安川久留美

たゞまれた轍は外の風を吐き

目ぐすりをホンの少うしビクニツク

東京富士野鞍馬

キリリツとして姐さんのゆるい帯

背負呉服粹向ばかり荷が軽い

長崎池田可宵

つまらないとは凡人の見た眼なり

懸引も見える激しい論告書



詠史川柳

につぽん (11)

戸田古方

封建社會(6)

(五十一) 大壁の乱(十九世紀)

一揆は百姓の世界だけではなく、飢饉のさいには都市の貧困者をもどん底へたゞきこ

んだ。大阪天満の與力大塩平八郎は陽明学の理論を地でいう革命の徒であり、幕府はその乱で鼎の軽重を問われる。

もうあとはどこでこの腹切るべきや

(五十二) 下級武士(十八・十九世紀)
商人に喰われたものに幕府

があり、諸大名があり、そして百姓がある。百姓と上級武士の貧困は万力のように中間にいる下級武士をしぼる。そして維新への推進力たらしめる。

浪人になる御許可も賜つて御家老の呉れそのまゝひからびる

(五十三) 御用金(十八・十九世紀)

腐つても鯛で、幕府や諸大名はしぼるだけしぼれなくなる高飛車に商人へ御用金をおくせつけ、態のいいゆす

りであるが、政治性のない金持は易々としてそれに應じ、自らを殞落させたものも少なくない。

御用金の御使者へ娘給仕に出

(五十四) おかげまいり(十九世紀)

皇室のお伊勢さんはいつの間にか民間信仰にまで商賣氣を出す。日本のお伊勢さんとなり集團参拜をはやらせる。

それと相應してお札をふらせたりする。皆下級武士中の智慧者が革命のために周倒に用意した秘策であつた。

合の山そこで精進揚げをするかえりにはうまくなつて伊勢音頭

(五十五) 蝦夷地と長崎(十九世紀)

三百年のひるねもようやくあかれようとする頃、表戸、裏戸をたたく音が段々とはげし

暑中御伺

(柳人交款のページ)

橋本 緑雨

大阪市東住吉区平野西之町五
電話天王寺⑦一一六七番

三條 東洋樹

神戸市兵庫区神田町七九

吉田 水車

名古屋市中千種区観月町
一ノ六五

主じごう氣が向いたのか
水をうち

土井 文蝶

大阪市西成区松通
九丁目二十二番地

生甲斐は子が育つのと酒の味
水谷 鮎 美
恙なく暮らし世間の隅に居る
長谷川 三 司
孫の守うれしく附も置いてあり
大 西 柳 堂

竹田 芦穂

大阪市都島局区内古市
大通四丁目五一番地

森口 太郎

大阪府南河内郡
藤井寺町字岡三九
電話藤井寺六四番

長野 井蛙

山口縣小郡

岸 南柳

大阪市阿倍野区天王寺町北
一ノ一八 岸男前製造所

石井 伸生

奈良縣五條町田中

山田 季 賛

山田 スミ子
廣島縣阿佐郡可部局区内
龜山村綾ヶ谷

川雜貴生川支部会員

しくなる。西南の九州、東北の北海道がまずその対称となり、海防など泥縄式な議論がはびこる。

讃美歌が神の船からきこえて来、アイヌより毛ぶかいカビタンさんで来た。

(五十六) 星條旗(十九世紀)

最もおそく最も効果的な戸のたつき方をしたのが合衆國のペルリで伊豆の下田に最初の星條旗を立てる領事館が出来、食糧のための牛を徴発したり、お吉というサービス、ガールを召上げたりする。

生き抜かん行手刃の多すぎる領事ハリス氣輕に日本語をおぼえ。

(五十七) 算王攘夷(十九世紀)

生さんがための下級武士は生さんがための理由を尊王だの攘夷だのともつともらしくカムフラージュしてとにかく討幕へ一步一步進んでゆく、社会史は支配階級の没落と被支配階級の興隆との轉換を説明してくれる。

狂言の案内もくる壬生屯所

(五十八) 夜明け前(十九世紀)

藤村の「夜明け前」は木曾街道に沿ふ山村を舞台にして、江戸と京とのはげしい来往を民衆の眼を通してながめさせる。何かしら希望をもつて下積のその日その日を物語る。

助郷ももう致しかね手をつかれ

血を流すことに男は躊躇せず

(五十九) 五ヶ條御誓文(十九世紀)

明治開國の根本義を示したものではあるが、所謂民主主義にはまだまだ程遠い。勿論署名は天皇によつてなされたとしても、その草案は時代の先覚者によつてなされたことはいうまでもない。

十六の帝御存知ない誓い

(六十) 錦の御旗(十九世紀)

西郷や勝などの努力で革命は無血に於て行われたが、七百年の武士は流さずにいられぬ血を上野に、会津に、五稜廓に流す。「宮さん宮さん」の軍歌が明治民謡史の第一頁をかざる。

直参の自殺も出来ず打つて出る立のきに障子の襷も拭き清め落人に惚れそれからの不倖せ鎮撫使の恣自叙傳にかゝれたり

不朽洞

市(は六月の月)

他島出張、布

哇切手奉行百年祭、日本のオエラ様歓迎と二十の扉、句会等々々で多忙の由

福島鉄児氏(岡山縣)

は六月二日の弓削句会への途上句帖を紛失され名句?の喪失にガツカリされていると

山路閑古氏(東京都)

は従来徒手体操をやつていられたが最近家元梅坊主師についてカツボレの手はごききうけ

の方が遙に運動になることが判り熱練上ひとり通つて朝夕の樂み

としたいと西いわを氏(大阪

市)は六月廿九日丹後の宮津への旅から一興謝の海バサリともせず舟を消ぐの句信を寄せられた

木村孤浪氏(平塚氏)は東京の共和燃料株式会社を辞し榮和商事株式会社の重役に就任された

丸山九郎平氏(岡山縣)は駅前川柳俱樂部を作り近隣の初心者を集め川柳の手ほどきをはじめられた

なほ同氏は第十八回刊山陽読者文藝川柳第一席(賞千円)に入賞された

根白星氏は仕事の関係で又一ヶ月延び七月末まで青森縣に滞在される由

中島生々庵博士(大阪市)は南区医師会々報(南区医師会提議湖周遊懇親会)を執筆された

富士野鞍馬氏は東京(四谷局)新宿区若葉町一丁目十五番地へ轉居

大阪形水氏は大阪府南河内郡登美丘町野田六六ノ三に轉居

石岡正司氏は西宮市鳴尾町小松宇島居前十五へ轉居

弘津柳慶氏の勤務先下関専賣公社が下関市本局区内大和町へ移轉

下記の諸氏は家事の都合で六月限退会された

水谷琴水氏、清沢柳清氏。

水田草骨氏(岡山縣)正

九坡氏推薦

七

新会員紹介

一品料理と生そば

タリル芝鶴

上六キヤビトル映

画館東三軒目

大

金

阪

泉

万

樂

石

田

阿倍野区阪南町西二ノ三三

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

前田伍健

松山市真砂町二二

横浜市保土ヶ谷区岩崎町一〇

福田山雨楼

大阪府阿倍野区王子町三ノ三四

菊沢小松園

大阪府阿倍野区文の里四丁目一五

水谷五郎

大阪府阿倍野区文の里四丁目一五

弘津柳慶

下関市上田中八丁専賣公社宅

青森出張中

山根白星

弓削川柳社

丸山弓削平

大阪府泉南郡東鳥取村黒田四八二

阿形一杉

大阪府阿倍野区阪南町中三ノ六

西いわを

岡山縣久米郡弓削町

福島鉄児

岸和田市野田町一七五

高橋操

岸和田市上町三六

内藤さき子

秋月宏方

和歌山市今福北郡二二八

石田沐天

福島縣信夫郡庭坂村湯町

福黄鉄山合資会社

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙

大阪府南河内郡古市町白鳥園住宅四九号

青柳扇子仙



いのちある句を創れ

投稿規定

用紙は原稿用紙、文字を正確に開き、月日及場所記入、締切毎月廿五日、投稿先本社宛

本社六月句會 (大阪)

六月二日 午後六時

於 大室文化會館

会場は例によつて、調員、路郎師の柳話、は明治四十二年に二十二年で世を去つた小島六厘坊氏に就いて語る。其エピソードは氏の略歴と性格を描写するに躍如たるものがあつた。大阪舞壇の基礎は自他共にゆるす天十六厘坊氏によつて作られたものであるとの讃辞で柳話が結ばれた。水谷鮎美氏の句計には吉田水車氏と大塚美能氏の句が引用された。兼題、席題の披露の後、発表をして午後九時半散会した。本月の不朽詞優がカッパ把持者は西森花村氏であつた。(幹事)

兼題「瘦我慢」 廊下 路郎選
瘦我慢やはいり喉氣に勝てもせず 鳥耕
寝こんで腹のへる瘦我慢 白柳子
着たきでパイヤーに勤む瘦我慢 へとち
瘦我慢ダブルベッドでぼつこかれ 妄舟
瘦我慢独りになつたあはらしさ 淡夢

瘦我慢昔の値段云つてゐる 鉄見
下積で居て職階を否定する 三司
かんぢんなどこ忘れた瘦我慢 鮎美
瘦我慢やめて洋モクもろて吸い 晴岸
お嫁入りなさおかしうて瘦我慢 志乃布
瘦我慢して大学をは出たが 豆秋
瘦我慢来いとも云はす来るな 海三
瘦我慢およしなさいと妻ズバリ 修三
倦怠期おつちも譲らぬ瘦我慢 眉水
兜脱ぐ時機を失ひ瘦我慢 十九平
はつきりと負けてゐるに瘦我慢 一杉
瘦我慢とう／＼ぶに落つて 胡蝶
せめて長男だけは火はけに瘦我慢 生々庵
腹がへつてもいじないへ泣きにくる 俊作
瘦我慢あんちようテをおこられ 博也
本当は寂しい父の瘦我慢 嗣骨
先手敗け破顔一笑竹田幸三 折水
この方がよろしきまゝなり 香林
ほら吹いて借金取りに攻められる 小松園
瘦我慢張れば女房ともめてゐる 同
この腕の続く限りの瘦我慢 春草
瘦我慢つもらぬこと知りながら 同
瘦我慢うつかり首を吊る処 無
思いきや我慢の強い彼の死を 同
重役のタイプ女につけこまれ 同
瘦我慢しきれぬ年となりけり 花村
チツプ出し孕はれてゐる瘦我慢 葉光
瘦我慢座り直して又座り 夢裡
瘦我慢とう／＼風邪をひいちゃい 野介
瘦我慢にもウイスキー呑みませ 白柳子
家中を心配させた瘦我慢 水堂
瘦我慢およしなさいと惚れて 葉光
瘦我慢僕も短冊ぐらゐ書き 路郎
サラリはごうあらうとも 同
斜陽族と云われたくない 同
兼題「仮病」 中島生々庵選
仮病しては無様に晴れ渡り 無人
美しい仮病に男あま過ぎる 葉光

愛人に仮病の熱を計らせる 同
聴診器仮病と云つて如才なし 三司
仮病でない証拠のやうに喉を巻き 葉
二次金を仮病で滞る月明り 史香
女房を病氣にさせて金を借り 紫蝶
おそろくは承知してゐる仮病 胡蝶
春廣着て仮病吹き込む電話口 同
利きすぎた仮病へ世の処方箋 梅里
仮病だと押せばメンスと下を向き 修三
仮病とも知らず園から為替着き 恒明
鏡輪へ集團仮病負けに付き 満年
仮病だと疑つていたことを恥ぢ 香林
御馳走をもらつて仮病起きあがり 忠美
娘の仮病目出たい事とするもよ 芦穂
灸が効く話仮病もきかされる 同
看護婦の似病微に入り細に入り 古方
流石名医仮病の舌を二度出させ 春巢
集金は仮病承知で腰を据え 正司
春日遅々仮病不案におびえる日 無人
初夏の陽がよしく仮病の乳ぶさ 鮎美
体温計仮病適さに振つてみる 貴山
漫性とは云はれる程の病で 夏六
仮病だと氣付かぬ者を送り出し 生々庵
兼題「見合」 市場及食子選
終遠い性が見合の場ふみ 水
女店員見合の方へ氣をとられ 眉作
夢醒めず見合は親に委しとき 俊人
駈引のない平常着で見てもらい 無人
ナプキンを手垢に染めてゐる見合 山風樓
公園の見合は景色ばかりはめ 同
よくのびた瓜を見合は見て滞り 同
反り橋を渡り見合の席に立ち 貴山
理解とは別に見合に持つ希望 無人
仲人がひとりしやべつて見合すみ 水堂
見合とは知らず常着の好い娘 志乃布
つゝましく見合お辞儀をした許り 芦穂
氣に入らぬ見合映画を見て滞り 紫香
あこがれが多く見合に遠のかれ 胡蝶

早引きをしてお見合の席にゐる 博也
写真よりいゝなと思ふ見合なり 淡舟
見合する切符と知らず出る日曜 史葉
自信はないが宝塚で見合 芹穂
附添も照れる見合はつゝがなし 淡舟
親馬鹿に見合はチヨツツ照れて てるを
教だけの見合で日取りせがまれる 栗
アブレ勢同志見合も派手にすみ 博也
強られたもへん人形の氣で出かけ 鉄兒
義理で行く見合、まなパフを打ち 同
歌舞座でめいめい見合いださ 俊作
琴の音静か見合へ鯉が跳ね 鮎美
サンダルの指も見られてゐる見合 同
お見合にこのにぎりすし大さき 同
見合馴れして勤続組に入り 生々庵
白足袋の見合となつて茶が 史葉
出来てゐるを知らず母は見合せ 鮎美
腫れものが出来て見合は延ばさる 香林
見る如く見ざるが如く見合すみ 喜久堂
兼題「謎」 新川 博也選
謎は謎生んでしまつた刑事室 胡蝶
町内の謎が新聞記事で解け 水堂
天井の謎を見て謎がとけ 白柳子
謎かけて置いて仲居はさつと 修三
結局は御首を買はず謎らしく 同
捜査線謎深まつたよ、莫れる 晴岸
紙芝居謎のつゞきへ親も立ち 妄夢

阪田騰写版
二五町田芝区北市阪大
会商田阪 株式會社
番一九九五島福話電
番四一一三六五

未亡人謎をふくんだ婿となり

蒲骨

謎を解く十手は糸切歯

哲水

謎を解く十手は糸切歯

正司

謎を解く十手は糸切歯

水堂

謎を解く十手は糸切歯

紫香

謎を解く十手は糸切歯

花村

謎を解く十手は糸切歯

淡舟

謎を解く十手は糸切歯

修三

謎を解く十手は糸切歯

生々庵

謎を解く十手は糸切歯

妄夢

謎を解く十手は糸切歯

淡舟

謎を解く十手は糸切歯

三司

謎を解く十手は糸切歯

俊作

謎を解く十手は糸切歯

鮎美

謎を解く十手は糸切歯

志乃布

謎を解く十手は糸切歯

貴山

謎を解く十手は糸切歯

山風

謎を解く十手は糸切歯

春草

謎を解く十手は糸切歯

没食子

謎を解く十手は糸切歯

俊作

謎を解く十手は糸切歯

鈍太

一流の藝妓矢張り恋に泣き

志乃布

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳は自叙傳の事につれ

落帶

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳は父の素性によて触れず

忠美

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳をお出しなさいとされて

茶々

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳の其後、養老院に死に

恒明

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳にお粥も食えぬとこあり

山風

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳の批判は甘い点をつけ

晴果

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳のつもとて自叙傳がきき

白柳子

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳の「ベージュ」から神がかり

古方

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳にまだビリオドを打たず

貴山

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳に母の苦勞をのべ盡し

葉光

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳を書く氣の机子にとられ

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳の執筆、神経痛の夜

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳の書斎へ孫が抱かれに來

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳を書かばならぬ社長至

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳のこゝら獄中記で埋め

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳は國を背負つたやと書き

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳とデスマスクを子に遺し

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳で僅の金を恩に被る

同

一流の藝妓矢張り恋に泣き

自叙傳で「お乳にぬれる満員車

同

男五人は奴隷の様に生き

蟹面坊

男五人は奴隷の様に生き

没食子

男五人は奴隷の様に生き

晴果

男五人は奴隷の様に生き

正司

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

男五人は奴隷の様に生き

同

大阪南支部句會(大阪市)

五月十六日 於 阿倍王子神社

須崎 豆秋報

自叙傳の生家は山に開かれて

自叙傳へ小さい生家写される

自叙傳の恋は向もなく終り告げ

自叙傳は自叙傳の事につれ

自叙傳は父の素性によて触れず

自叙傳をお出しなさいとされて

自叙傳の其後、養老院に死に

自叙傳にお粥も食えぬとこあり

自叙傳の批判は甘い点をつけ

自叙傳のつもとて自叙傳がきき

自叙傳の「ベージュ」から神がかり

自叙傳にまだビリオドを打たず

自叙傳に母の苦勞をのべ盡し

自叙傳を書く氣の机子にとられ

自叙傳の執筆、神経痛の夜

自叙傳の書斎へ孫が抱かれに來

自叙傳を書かばならぬ社長至

自叙傳のこゝら獄中記で埋め

自叙傳は國を背負つたやと書き

自叙傳とデスマスクを子に遺し

自叙傳で僅の金を恩に被る

自叙傳で「お乳にぬれる満員車

自叙傳の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

奴隷の眼に草があんたと伸びて

川 岡山縣廳支部句會(岡山縣)
五月十二日 於縣廳內新縣課堂 服部十九平報

茶柱を今日の願とともに吞む 青 柳
茶柱へ心うきく 十八九 紫 郎
茶柱が立つて番茶も喜ばれ 三 葉
茶柱を倒さぬ様にそつと呑み 筈
茶柱へ將女の機嫌チト直り 忠 美
茶柱が立つた茶碗を子に譲り 夢沙子
蔭膳へ茶柱立つた茶を供へ 十九平
恋人の表情変りハツとする 茶屋平
表情の変化を刑事見逃がさず 三 葉
表情を見てから當てる占師 九 六
孫と來て信号灯も教へられ 太 六
交叉点天下御免の消防車 作 州
交叉点視線があつたまゝで過ぎ 中 山
お上りと見られたくない交叉点 びか一
見送りは交叉点までついてゆき 忠 美
居眠が覺めて袍をあわてゝ見 き 子
ハツと眼を覺ませば社長立っており 忠 美
居眠りの課長はそつとしておかし 四 案
夕立へカン／＼帽の入れどころ 忠 美
正札のついた帽子を覚えて帰る 十九平
向うから帽子をとつてくる落日 四 案
石鹼を娘はあれこれと使い分け 案 山
石鹼は袖の下で事が足り 七 山
女湯の仕切の上をシヤボンが走 忠 美

日の丸句會(鳥取市)
五月二十五日 於自動車會議堂

雨が降ろうと酒さへあれば、祭 至 高
酒足りて良い祭ですなと喜ばれ たかし
お祭の寄附は隣りのたかを聞き 芳 道
地祭やさかいというて呼ばない氣 日 潤
なんで来なんだぞお祭りの馳走が來 同
遊立をしても税金拂へんぞ 一 歩

アツッパ一つで通す夏衣裳
亡き母の夏の衣裳に山車を引さ
バトロンがあるのか派手な夏衣裳
生娘と云ふふれ込め見合なり
奥さんが尋ねて廻る梯子酒
つき合ひが悪いとぐずる梯子酒
飲む前に予算にあつた梯子酒
梯子酒最初の店へ舞い戻り
新築の間取りに妻も口を入れ
新築の途中で金が底をつき
新築の牛ば隣りがボヤを出し

貴美子 柳窓 日洞子 芳道 遊星 喬水 露風 日洞子 遊星 秀利 日洞子

南區 川柳同好会(大阪市)
醫師會
五月二十二日 於 淺野 泰路居
還らずしてあぐらになれぬ親しむべし
あぐらしゝ兒等の嘆く氣に思ふ兄娘り
大胡座かいて親分らしい見え
まつさに胡座の組めども度胸
スリゝ寝る子にあぐら解きかねて
胡座かき鏡みつめるアブレの娘
柔道もあぐらと共に子は覚へ
あぐらかくさんには猫が飛つて来る
先生の誤診よと妊娠されてみせ
誤診され救はれたと未亡人
内心で誤診を詫びる術佛前
誤診とは以ての外とシラをきり
誤診して菓子折貰う時もあり
誤診をば風邪がこじれたなど云い
人生も誤診でしたと老先生
誤診とも何とも言はず処方かえ
信じては居るがお見立て膽におちず
立会いはいドイッ語で誤診かはうなり
翌日は合併症にしてしまひ
ゞ誤診老醫はうまく云いのがれ
もう死んだ者の胃腸とバズで逢い
誤診でもあの先生と信じ切り
誤診した注射の代も拂はされ
誤診した病家の門はさけて行き

同 達 路 無名林 和佐 瑞川 拾舟 彈正 一哲 海野 鳥耕 生々庵 島耕 瑞川 彈正 海野 一哲 海野 鳥耕 生々庵 瑞川 彈正 海野 鳥耕 生々庵

優良品質
先鋒カワチ
TACHIKAWA PEN

大阪市東區後町四八
立川商事株式會社

タチカワピシ
タチカワゴム
タチカワ西紙

親に上つて見れば誤診であつてはし
 悠々と誤診のまゝに押し行つて行く
 誤診ながもう病人は治つてゐる
 蕎麦が氣にならず負けたさへ云ふ
 蒸籠を重ねて通を聞かされる
 忘られぬそば一杯の人の情
 支那それの館も身に右氣の染り
 勉強の忍ヘチャケルマういける
 手打ちそばふるさとの味町の味
 そば屋一軒ありのアシタスのみたがり
 老夫婦引越しそほのことに触れ
 あれてまだ生きている氣か三十日蕎麦

川柳一路会（大阪市）

六月十四日 牧野七郎報

東京に女を抱きに來たごとし
今週の土曜日は迷ふ女なし
土曜日のベルお化餅はすんでいる
アベックへの十二時半のベル
女だつてだつてと女たばこ喫う
土曜でもきつちり終りいやぢやない

同路郎朝多郎七郎不意同路郎朝多郎七郎



編輯室にて

▼編輯の仕事は板場と一緒でよい材料が第一である。いくら料理人の腕が冴えていても腐った鯛ではどうにもならぬ。毎号好評なのも、諸君が提供される材料のよさに外ならぬ。一段と精進を要する。▼本号の表紙「眠猫」は東京の由比薩郎画伯を煩はした。▼「飯を炊く名士」は特別編輯として名士の方々にお願したが、なか／＼自らの強い腕前の方もあつて興趣一〇〇パーセントである。御多用の中を特に回答をお寄せ下さった諸先生の御好意を感謝する。

▼川柳吟行「馬哇へ飛ぶ」はハワイ柳人の氣を吐くもの、貸切旅客機での吟行はこれをもつて嚆矢とする。▼「武蔵坊弁慶」は古句研究家としての富士野鞍馬氏がウチチクの一編である。▼「川柳漫報」は小畑自由柳氏独自の筆、久しぶりの登場である。▼「詠史川柳」につぼんの稿は川田古方氏が日本を斬らしい角成がら詠んだもの、その根柢よさが遂に現代に肉迫して来た。▼前田伍健氏の「河童の灸」、吉田水車氏の「二階」弘津柳

慶氏の「次男誕生」等々々の筆もそれ／＼に持ち味が出ている。▼拙稿「続川柳講座」は全く久しぶりの発表である。▼毎号書き続けたいのであるが、全事に忙殺され資料を集めるひまがないので、当分は宛葉の発表に甘んじなければならぬのを遺に思っている。▼「各地柳境」の探録は当分度々が担当することになったので私の負担が軽くなったが、特に「つぼ」は手ごたえがない。「各地柳境」の句会報は宛葉の形式をすつてほしい。整理に大変な時間がかかるのでお願する。

暑中御伺

句三昧に暑さなし
と存じます一層の
精進を

川柳雑誌社編輯局

麻生路郎

川柳不朽洞會

中島生々庵

まらぬ。いゝ作家は沢山いるが、いゝ読者となると詮考難である。こちらで認めても引き上げてくれねばなんにもならぬ。しかしそのうちに何んとかねと思ふ。七月に生々庵がB.K.墓の句の選評放送をやつた。句を一回読んで短評

をやり、短評後に更に三回句を添んだが聴覺に訴える場合親切な方法である。▼「不朽洞の喫煙室」へ不朽洞会員外の寄稿があるが、この方々会員に限られてるので御遠慮が願いたい。▼川柳雑誌部の開設について、社内支部係宛に申込み、支部規定によつて開設していただきたい。勝手に支部名称を用いて句を寄せらるゝもももあるが、そのままで探録出来ない。▼南電電鉄川柳部で電光・エース見学川柳会をやり、私の等の大位の句を其晩すぐにスカイサインで発表したが、川柳の発表機関が、新聞や雑誌にスカイサインに押し付けられたことはコカイである。

▼ことしの梅雨は屋上に豪雨となつて各地に被害があつた。旅行をしたことのない方が、地面をひろげては柳各社の安全をお祈りしている。これから暑さは急ピッチで上昇することと思ふ。健康上特に注意されたい。



C58型

マツサカパークの汽車は東海道線急行列車の機関車と同型です

一日ちそべる

マツサカパーク

松坂屋 屋上



ルービヒサア

この一杯で
元氣
横溢!

社会式株酒麦日朝

自轉車は

シマノの

3.3.3号



募 集

課題吟募集

手荷物(十句) 大西八歩選
賣店(十句) 大鶴喜由選
映画(十句) 須崎豆秋選
社宅(十句) 國弘半休門選
(八月廿五日開始)

毎号募集

近作柳樹雜誌廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜誌) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)
(毎月廿五日開始)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樹」は一般作家の雅吟を載る。
▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。
▼「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

R列5号 毎月一回一日発行

川柳雜誌 第六卷 第八号

一冊 金三〇〇円

送料(三〇〇円)

牛ヶ年概算 金一九八四

一ヶ年概算 金三九六四

昭和廿六年 七月廿五日印刷

昭和廿六年 八月一日発行

大阪市住吉區南内方四丁目二五番地

行司藤入 麻生 幸二郎

發行所 川柳雜誌社

大阪市住吉區南内方四丁目二五番地 電話 七五七〇

Made in Occupied Japan